明治二十六年十月二十五日發行

THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

每月二回



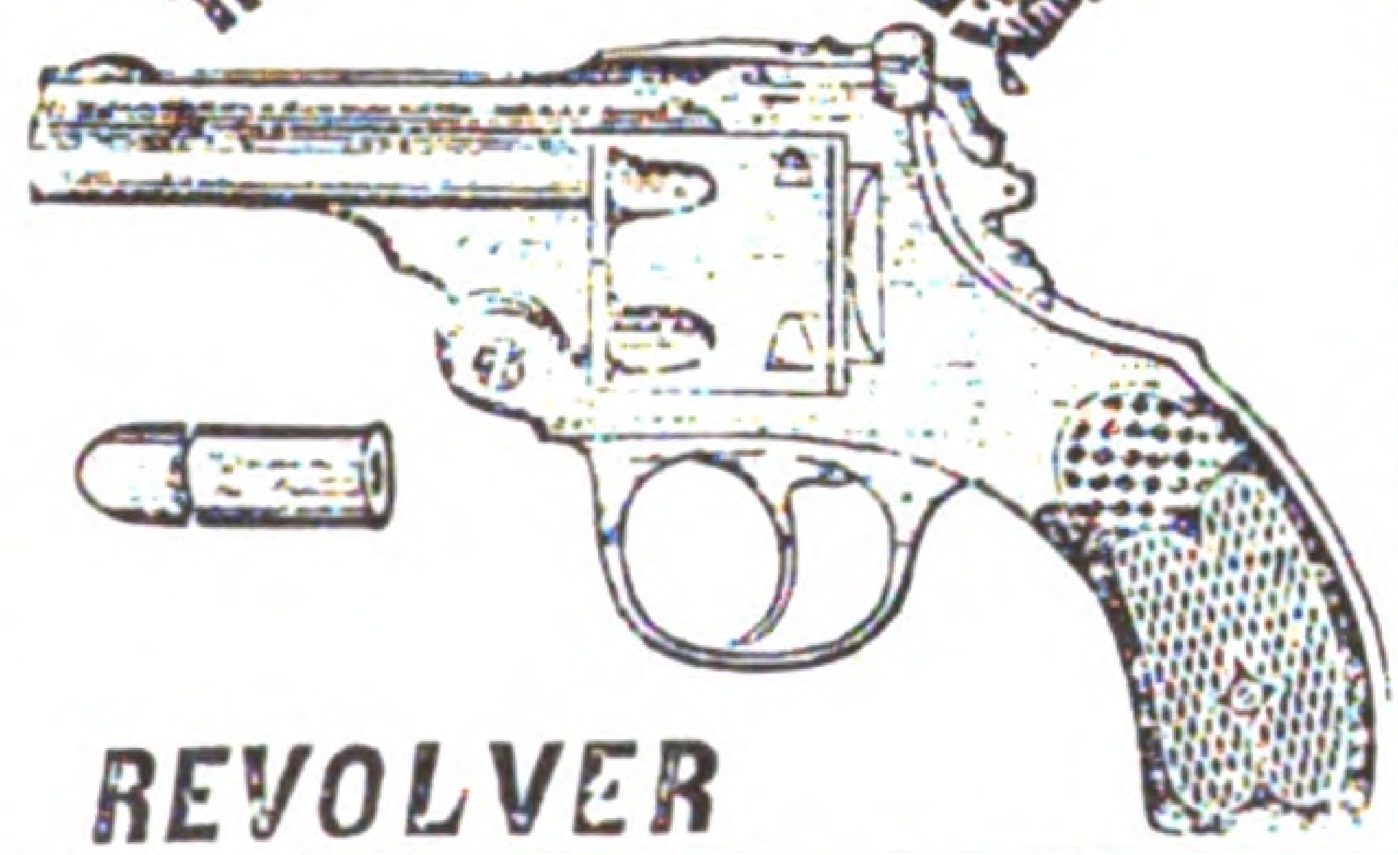
第拾六號

◉特色……實用裝飾共ニ完備セル輕便無比氣止ノ良器ナリ
◉特色……遠隔地ノ注文ト雖モ其厚キ御信用ニハ背テ背ズ

◎生命財産保護之最良器

人生一日モ缺ク可ラザル最必要器タル護身用ピストル銃ハ弊店日本一手特約輸入ニシテ彼ノ世上ニ在リ觸タル危險極ル普通ノ粗惡品トハ異リ一種特別ナル新形ニシテ機械ノ構造ハ堅牢無比其外部ノ裝飾ハ銀色燦爛トシテ頗ル美麗ナルノミナラズ錆ヲ生スル憂ナク旅行携帶等ニハ安全ニシテ最モ輕便ナルヲ以テ完全無缺ノ護身器ト夙ニ歐米諸國ニ聲譽ヲ博シタル米國有名ノ「ハルバート、プロス」社其他十數社ノ製造品中精好ナル新形ノミ四十三種ヲ撰擇シ其價格ノ如キハ一挺價金貳圓五拾錢ヨリ金貳拾五圓マデニシテ該社同樣他ニ比類ナキ大廉價ヲ以テ百事誠實ヲ旨トシ懇篤ニ販賣致候間多少ニ不拘御購求之程希上候

護身用新形



REVOLVER

◉注意……近來粗惡ナル類似品多シ直接ノ御注文ヲ希望ス
▲銃砲各種雜形圖解付正價報告書二冊御報次第無料郵送ス
●米國ハルバート、プロース銃砲商會日本一手特約販賣
●同　スミス、ウエッソン製銃會社特約販賣
●同　ハーリングトン製銃會社日本一手特約委托販賣

横濱市本町二丁目廿一番地（電話百五十五番）
銃砲火藥輸入販賣免許商
金丸謙次郎

國民之友

國民之友は既に雜誌界の巨人として認識せられたり、彼の『社説』は眼と手と共に到つて大勢を揣摩し、事に先つて事を論し、靜かにしては人生の問題より、激しては時勢問題、社會問題の骨髓に衝き入る、彼の『寄書』は天下の名士か特に考へ特に草したる卓論を集めたるもの、名家慘憺の經營に成りたる名篇を集めたる『藻鹽草』と双璧の觀をなす『史論』の痛快明透なる見識は以て『雜錄』の艶麗瀟洒なる題目筆力と對すべく、『批評』の精嚴は『時事』の深酷に對すべく、『當今之問題』あり『海外思潮』あり『經濟時事』あり、時に『大勢一斑』を揭けて大勢の推移を論す。

毎月三回（三日十三日廿三日）發兌
定價一冊六錢　廿冊前金郵税共一圓廿錢
廣告料一行十五錢○爲替向所は芝口郵便支局

發行所　東京日吉町　民友社

舶來冬物澤山着荷

流行の帽子▮肩掛▮シヤツ▮ハンケチ
手袋▮靴足袋▮束髮ピン▮婦人洋服附屬品等

婦人洋服附屬品商
新橋南金六町
關口商店

◎◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

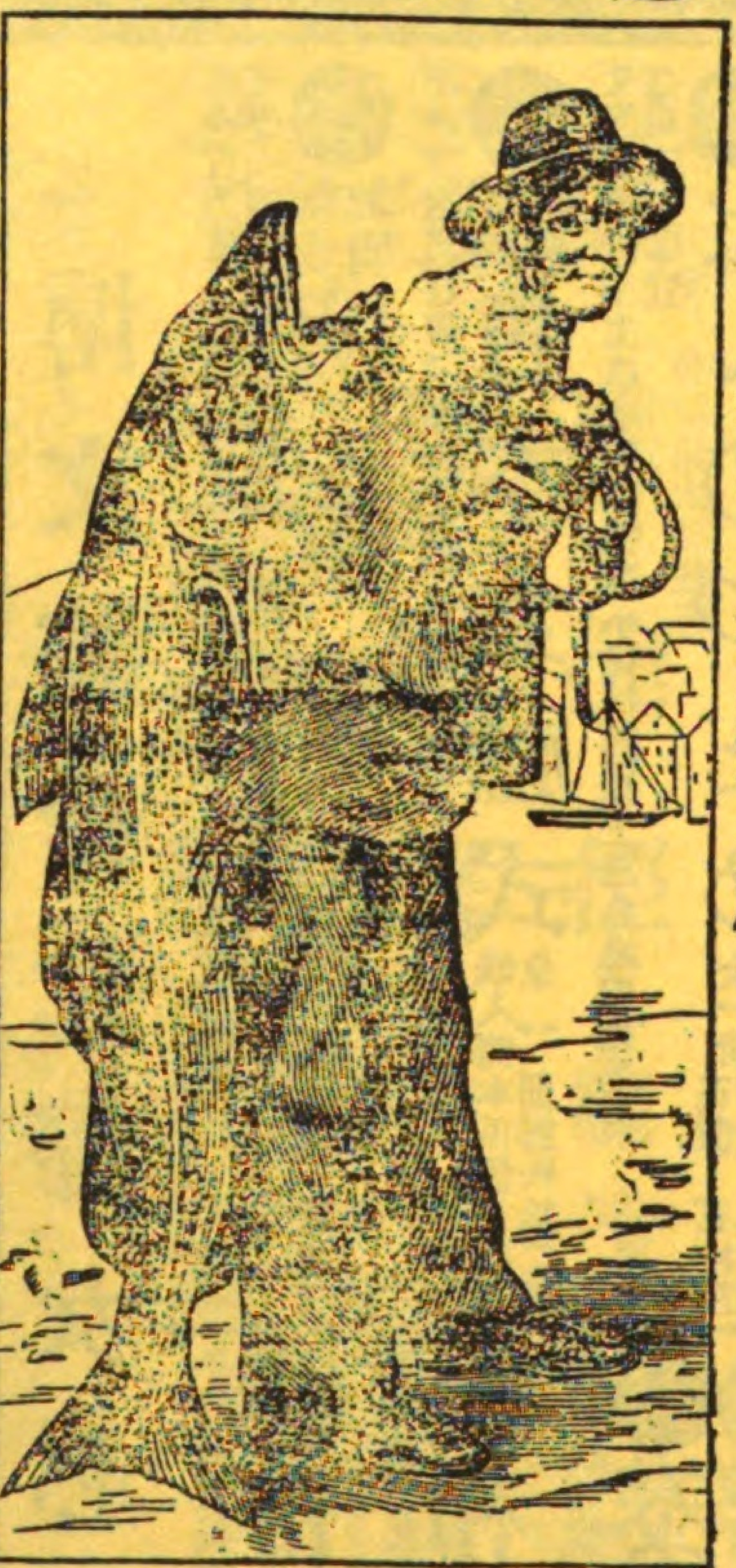
◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞贊措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

横濱廿八番
神戸十七番　米國貿易商會

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

博文館發兌婦女必讀書類廣告

- 三條實美公 芳川顯正君 渡邊洪基君 清浦奎吾君題序 文學士澁田健次郎君校閲 中洲濱本義顯君著 婦女教育 **明治姬鏡** 全一册 正價五拾錢 郵稅八錢
- 坪谷善四郎君著(楓湖、永湖、月耕密畫) 閨秀錦囊 **日本女禮式** 帙入美本 全一册 正價五拾錢 郵稅拾二錢
- 文部省學校衛生事項取調囑託小兒科醫學士三島通良先生著 皇后陛下御覽 **はゝのつとめ** 全一册 正價五拾錢 郵稅六錢
- 華族女學校學監從五位下田歌君述 **家政學** 全二册 正價六拾錢 郵稅拾二錢
- 坪谷善四郎君著 **家政整理法** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 飯島半十郎君著(密圖挿入) **家事經濟書** 全一册 正價拾二錢 郵稅四錢
- 山田美妙齋君著(密圖挿入) **日本室内粧飾法** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 醫學士中村正道君著 **小兒養育法** 全一册 正價拾錢 郵稅四錢
- 子爵福羽美靜先生校閲、西田敬止君著(文部省檢定濟) **帝國女子修身鑑** 全四册 正價六拾錢 郵稅拾錢
- 下田歌子女史題辭、西田敬止君序文、岸上操君撰 **和漢婦女龜鑑** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 幸福散史澁江保君著 **泰西婦女龜鑑** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 子爵森有禮君序文、戸塚文海君序文 陸軍々醫總監松本順君題辭、堀誠太郎君譯 **婦女性理一代鑑** 全一册 正價三拾錢 郵稅拾錢
- 第三高等中學校教授醫學士高橋金一郎君著 **通俗看病法** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 須永金三郎君著(密圖入) **婦女手藝法** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 東京府高等女學校教頭永江正直君著 **女子教育論** 全一册 正價拾五錢 郵稅六錢
- 矢島錦藏君序文、伊東擧次郎君著 **胎内教育** 全一册 正價拾二錢 郵稅四錢

◉民友社出版書籍目錄

毎月出版 十二文豪

一冊紙數二百頁內外十二冊完結

十二文豪第一卷 カーライル 平田久著 一冊定價拾八錢 郵稅四錢

十二文豪第二卷 マコウレー 竹越與三郎著 一冊定價拾八錢 郵稅四錢

十二文豪第三卷 荻生徂徠 山路彌吉著 一冊定價拾八錢 郵稅四錢

十二文豪第四卷 ヲルヅヲルス 宮崎八百吉著 一冊定價拾八錢 郵稅四錢

猶ほ以後出版の書名幷に著者人名は左の如し

平民叢書第六卷
現時之社會主義
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書號外
銀貨之過去現在未來
定價拾錢
郵稅貳錢

平民叢書第七卷
經濟と道德
定價拾貳錢
郵稅貳錢

國民叢書
人物管見
定價拾五錢
郵稅四錢

國民叢書
青年と教育
定價拾五錢
郵稅四錢

國民叢書
靜思餘錄
定價拾五錢
郵稅四錢

第一
國民小說
定價拾五錢
郵稅四錢

第二
國民小說
定價拾五錢
郵稅六錢

第三
國民小說
定價拾五錢
郵稅四錢

湖處子宮崎八百吉著
歸省
定價拾五錢
郵稅四錢

德富猪一郎著
九版 **新日本之青年**
定價貳拾錢 郵税四錢

德富猪一郎著
再版 **國防論**
定價拾五錢 郵税貳錢

掘原保人著
政黨論
定價貳拾五錢 郵税四錢

文學博士元良勇次郎著
佛國不換紙幣發行始末幷**信用論**
定價拾錢 郵税貳錢

佛國ブーミー原著 深井英五譯
英米佛 **比較憲法論**
定價貳拾錢 郵税四錢

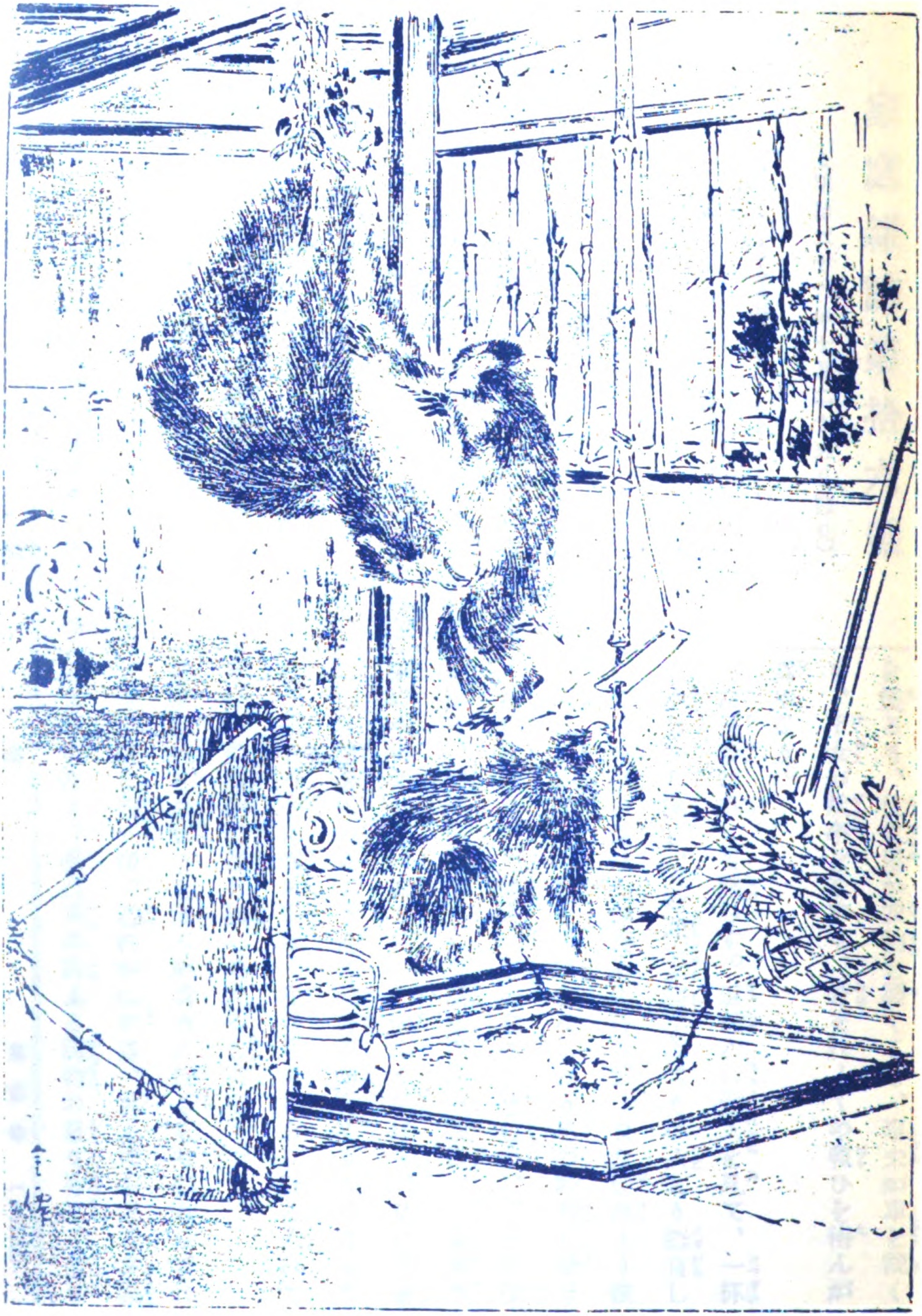
德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
四版 **誕生日**
定價拾五錢 郵税貳錢

人心の明鏡處世の秘寶
六版 **一語千金**
定價五錢 郵税貳錢

○**發行所** 東京京橋區日吉町 **民友社**

明治二十六年十月廿五日發行
家庭雜誌第拾六號

目錄



家庭雜誌第拾六號

（明治二十六年十月二十五日發兌）

社說



慈善

慈善とは、慈悲の心より湧き出でたる行ひを云ふ。憐れなる人を見て憫み、悲しき人を見て悲み、己が心を以てその誠を竭すは慈善なり。或は千金を投ずるも慈善にあらざるとあり、或は一飯を惠むも慈善なるとあり。慈善と慈善ならざるとは、其の與ふる物、若しくは金額等にあらずして、その與ふる人の心によりて定まるものぞ。

世の中の事、概ね交換的ならざるはなし、人の働くや報ひを得んが爲めなり。大工が家を作るも、左官が壁を塗るも、仕立屋が衣物を製くるも、車夫が車を挽くも、下女が炊事をなすも、皆それ〲の報ひを得んが爲めなり。

唯た慈善は決して然らず。道傍の行倒人を見て、一杯の水を手に掬し、その面上に灑くは、その人より難有しとて、謝禮を受けんが爲めにあらず。又た世間より彼の人は感心なり、斯くの事をなしたりとの評判を受けんが爲にあらず。清き、温かなる慈悲心が、自然に湧き出て、然るを覺へすして然るのみ。慈善は勿論無報酬のものにして、既に報ひを得んと思はゞ、是れ商賣にして慈善にあらず。世に慈善の商賣てふものはなきなり。『右の手に爲す事は、左の手に知らしむる勿れ』とは、商賣的慈善を誡しめたる金言なり。

却說慈善とは報ひを得んが爲めに行ふものにあらざれども、之を行へは、己れが心には、言ふ可らざる幸福あるものなり。是れ天の與ふる賜物の最も尊く、最も

高く、最も大なるものにして、其の愉快なると、自から其の境を踐むにあらざれば、其の消息を知る可らざる也。大なる詩人セッキスピアーは『人を惠むは、惠む者にも、惠まるゝものにも、幸福を與ふ』と云へり。聖書には、一層その眞理を說明して『受るものよりも、與ふるものは福ひなり』と云へり。人を愛する時には、己が心は神の如くなるなり。慈善は愛の結晶なり、人若し眞に慈善を行はゝ、その心は神と一致するなり。平和も此に在り、安心も此に在り、所謂る天國はその人の心の裡に宿るなり。之を無報酬の報酬と云ふ。

己れ多忙なるが故に慈善を行ふ能はず、己れ貧乏なるが故に慈善を行ふ能はず、己れ力なきが故に慈善を行ふ能はずと推諉する勿れ。凡そ人たるものは、何人にても慈善を行はざる可らず、又た慈善を行ひ得可きなり。慈善は必らずしも慈善會員のみの持物にあらず。己れが慈善の心を以て、その誠を隣人に竭すは、即ち慈善なりと知らずや。一碗の澁茶も、疲れたる旅客には、千金の賜物より難有かる可く。一片の笑も、憂あるものには、限りなき樂みなる可く。一對の古足袋も、一枚の破れ單衣も、心の誠を推して與れは、金剛石の頸飾よりも難有く感す可し。慈善は金高にあらず、慈善は品物にあらず、慈善は心なり、慈善は眞なり、慈善は愛なり。



特に家庭に於ては、慈善の空氣は、一家健全の基ひとなる可し。何れの家にも廢物少しとせず、若し主婦た

るもの心を留て、燈下に兒を睡らし、催眠歌を唱へつゝ、その破れたる衣類を補綴し、之を憐れなるものに與ふるが如きあらば、是れ實に最も淸き慈善にして、此れが爲めに間接に感受する家庭の幸福如何計りならむ。斯の家庭こそ即ち天使の宿りならむ。

彼の小兒小女杯にも、それ〴〵の道を以て、彼等をしてその己れの物を割ひて他に惠むの習慣を養はしむる時には、自然にその小兒小女の心も、氣高く、心廣く、慈悲深く、誠實なるものとなり、他日は必らず立派なる善人とならむ。善人となるは、善を行ふより先なるはなし。

若し或は一家の祝節に際しては、その費用の幾分を節して、慈善費となすが如きは、家庭の美風を保つ、最上の道なる可し。

史談

マダム、ド、スタアル上

前世紀の末方より今世紀の初にかけて宛ながら山上の燈臺の如く歐洲に輝やきたる婦人ありき。佛國のマダム、ド、スタアルと云へる婦人は此れなり。佛蘭西は古へより有名なる婦人に富むと稱せらる。然れどマダム、ド、スタアルの如き婦人は幾百年の佛蘭西史に僅かに一度其跡を垂れしのみ。其一生を按ずるに、才高ふして學び難く、行不羈にして學ぶ可からざる所多しと雖とも、其生涯は亦大に觀察を値ひせずんばあらず。試みに簡短に其生涯を敍し見む歟。

佛蘭西王政の末路、恰も大革命に入らんとするの前、路易十六世の相となつて窮れ果てたる一國の財政を回復せんと試みたるチッカアは、即ち女史の父なりき。

女史の生れたるは千七百六十六年、其父の巴里の一銀行商たる時なりき。女史名をアン、ルイ、ゼルマン、と呼びぬ。家素より富み、父母共に夙に名ありければ、其家には有名なる學者文人寄り集ひ、女史は其高談雄辯を以て充たされたる空氣を吸て此中に人となりぬ。女史の敎育は母氏專ら之に當れり。母氏亦素より學問あり識見あるの婦人なりしが、唯甚だ嚴重にして、規則を唯一の敎育法とし、其女を驅り立てゝ只管勉强の道に走らしたれば、流石の女史もあまり嚴重なる敎育に堪へ兼ねて健康を傷り、醫師は一切萬事を擲て田舍に退き休養すべしと勸むるに到りぬ。斯く吾敎育法の吾思ふ通り行はれず吾女を吾思ふ如く造り成し得ざりしより、此後チッカア夫人の其女を見ることも又た昔の如くならざりき。後年人ありて母氏に向ひスタアル女史の英才を稱讚せしに、チッカア夫人答へて云はく、御言には候へども妾が仕立度く望み候ひし所に比すれば彼女の今の手際は物の數にも候はず」と。

境遇は女史をして年にませて成人ぶり氣高く學問に誇る樣にならしめたり。女史は幼きより尤も談話を好みぬ。談話は婦人の利器、殊に佛國婦人の長所、而してスタアル女史は其佛國に於て今古無比と云はるゝ程の談話の達者なりき。抑亦筆は人形と同時に弄び始め、先づ人物のスケッチより詩、論文、淨瑠璃に到るまで筆を着けざる所なく、十三の年書きたる「モントメルシー」てふ戲曲は頗る妙なりとの評あり、後々までも女史は之を人に讀み聞かすることを好めり。併し或人の云へる如く、女史は能く讀むよりも寧ろ能く書けり。十五歳にならざる内に、女史はモンテスキユーの「萬法精理」に註釋を施し、「ナンテの布告」につきて一篇の論文を草し、亦其父の「財政篇」を匿名にて批評せり。女史が此批評をなせし時、父讀むで大に驚きしが、文辭によりて此批評家は即ち吾女なるを知りぬ。其の

筆は實に如斯くよく動けり。

一生の長き、スタァル女史は一刻として愛しまた愛せられずして生活する能はざりき。斯く溢るゝ如き情愛ある女史始めは之を父に注きて、殆んど神の如く其父を崇拜せり。何某氏の著書を評しては曰く、此書甚だ妙なり、敬服に堪へたり、要するに此書中の二ページ丈はチッカァ氏（女史自家の父）の議論にしても恥しからず」と。見識の事を談じては曰く、識見の士は甚だ世に稀なるものなり、吾父の如き識見家は未だ曾て他に見たることとなし」と。

チッカァ孃の結婚は甚だ困難なりき。孃も父母も成る可く佛蘭西人との緣組を望みたれども、其は甚だ難かりき。チッカァの家が商人なるが故に門閥の家と緣を結ぶ能はざるにはあらず、チッカァは新敎徒なるに、當時の法は渾て新敎徒に正當の權を與へず、新敎徒の子は法律上私生の兒と認められし程の世の中なりしか故なり。女史十七歲の時、フォンテンブラウの廷に於て英國未來の大宰相那破烈翁の大敵たる俊秀の名士ウィリァム、ピット當時二十四歲、年甚だ弱しと雖ども、父子二代の人傑として聲名早く歐洲に藉々たりき。ピットは深く才氣劔花の如き女史に見る所ありしにや、英國に歸るや否あらためて結婚の申込をなし、チッカァ氏夫妻は結婚を賛成せしが、女史は一日も巴里を離れては生活することと能はずとて斷然之を拒絕せり。此事は甚だピットを失望せしめたるのみならず、當時已に死に瀕し居たる女史の母其人の如きも此れより餘命の存する間其女に對しては半勘當の姿なりき。世に傳ふ、ピット終身娶らず、其故を問へば、ピット答へて「吾れ已に我國と婚したり」と云へりと。若し實際此言ありしとすれば、無論此事の後なりしなる可し。

鹿は終に當時佛國交際社會の切れ者なる瑞典公使館秘

書官エリク、マグノス、フオン、スタアルホルスタイン男爵の手に落ちたり。是より先き同氏はチツカア孃に婚を求むること五年に及びぬ。然るにチツカア家は當時日の出の勢、殊に其女は少小より早くも巴里の評判となれる程の婦人なれば、チツカア家よりの要求中々六ケ敷かりき。其要求の一斑を擧ぐれば

第一條　スタアル男爵の佛國駐剳瑞典全權公使（シカモ終身官）に任ぜらるゝ事。

第二條　若し事變ありて此職を奪はるゝ時は一年二萬法の恩給金を受くる事。

第三條　伯爵に昇敍の事。此は當時ド、スタアル男爵夫人なる人あり、亦同名にて評判好からぬ婦人あり、仍て區別の爲此要求するものとす。

第四條　スタアル男爵の方にて其妻を瑞典に長く連れ行かず連れ行くとも必らず先づチツカア夫妻の承諾を經る樣堅く約定する事。

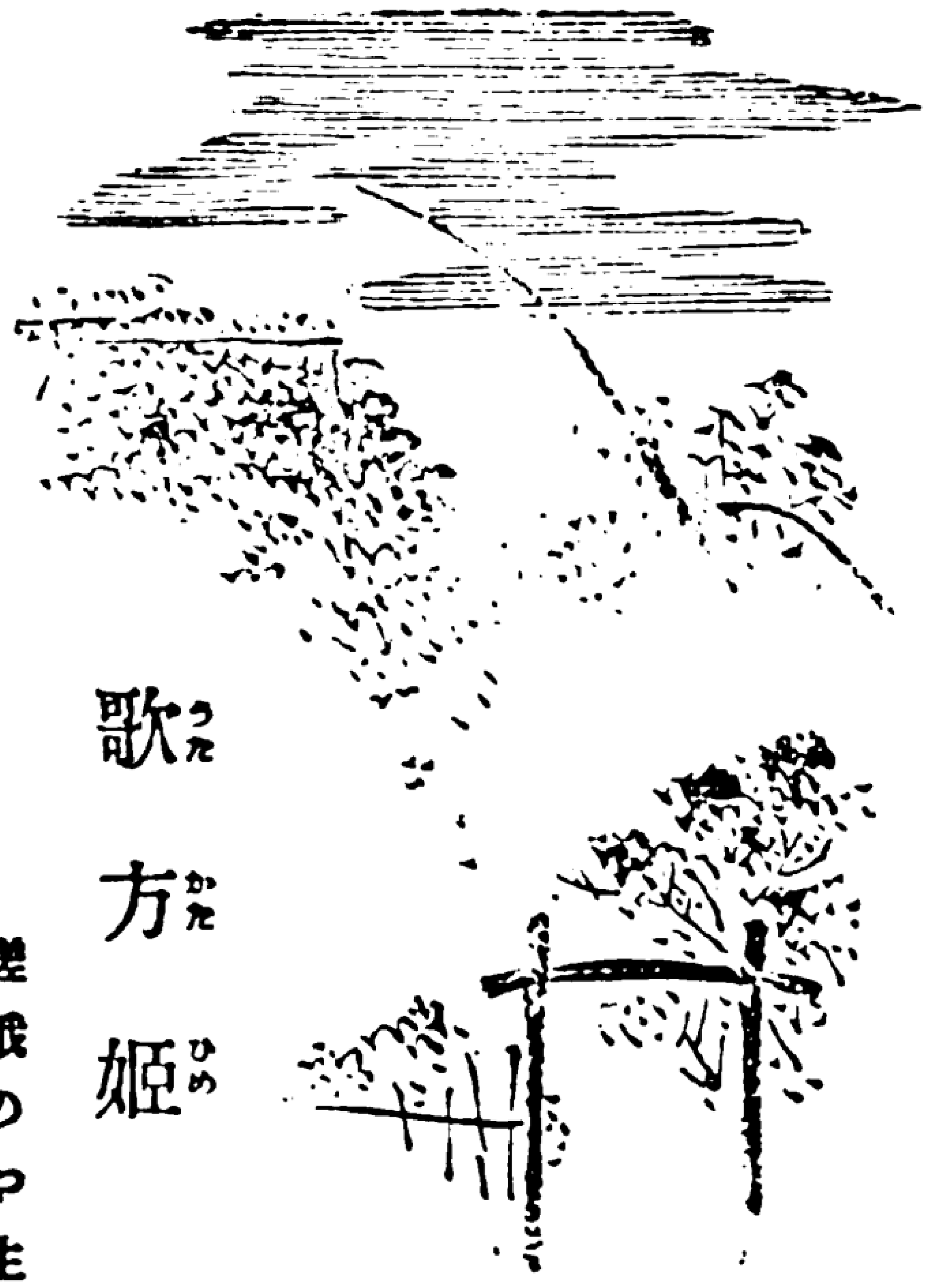
第五條　新公使（即ち新郎）に北辰勳章を授與せらる可き事。

第六條　皇后（佛國路易十六世皇后マリーアントアチツト）より此結婚に付公然贊成の勅諚を下さるゝ事。

瑞典王は始めは此條件を承諾せらる可くもあらざりしか、佛國皇后マリーアントアチツトの切なる願望によりて、伯爵の稱と終身官の二條を除き渾ての條件を諾せられ、即ちスタアル男爵を佛國駐剳公使に六年間任ずるの令を下し、猶また六年の加任を約せられたり。此の際また他に二人の求婚者あらはれたり。一は某伯爵の子にて直ちに其競爭の塲を去り、一は獨逸メツケンベルヒのヂオルヂアウグスタス親王にて女史若し結婚せば英國の王の親戚とする可しとて慫慂せしも、スタアル男爵勝を占めて、女史と男爵との結婚條約は佛蘭西國王皇后親しく之れが證人となり、千七百

八十六年一月チツカア孃は愈マダムド、ユタアル夫人となりぬ。時に女史二十歳なりき。

文藝



歌方姫

嵯峨のや主人

第二章

梅ケ香を櫻の花に持たせつゝ、
柳の枝にや咲かしけん、
匂ふ計の乙女子の、
花の姿を一目見て、
心狂はす煩惱の、
犬の山豪七八人、
乙女の周圍取籠めて、
貌見合せてほくそえみ、
涎したゝる聲たゆく、
のう美しの乙女子よ、
（かき口説くこそおかしけれ。）
のう美しの乙女子よ、
そも我々は三界に、
里もなければ家もなし、
月てる天を家根として、
葦しげる野を床として、
斧、劔、弓、矢、長刀友として、
草の野原の風のごと、
そことしもなく押歩く、

緑の林山豪なり。
されど我等も人なるを、
姿こそ斯荒びたれ、
情の心なからんやは。
雨さみだれてふる朝、
月さへ霜の寒き夜半、
煩惱の犬たけるなり。
のう乙女子よ今も今、
汝の美しき姿見て、
心の駒は狂ふなり。
これやのう露の情、
慈悲ぞかし我佛、
かけてよ、これ露の情。
寄る糸の目を糸にして、
乙女の耳に咡けり。
けがらはし耳に入るゝも、

色にくるふ獸の聲。
波立つ胸押静めて、
冷かに笑ふ花の唇、
白き目に獸をじろり。
あなかしましき人達哉、
旅路に疲れて草枕、
夢快く結べるを、
うたてや無情ゆりさまし、
幻の耳に咡きし、
愚や、そこの願言、
他の女子に語れかし、
妾は聽く耳持ぬものを。
柱によりて眠りかくる、
姿は花、心は鐵、
まろばし難く見えにけり。
山豪目と目を見合せて、

斯るさびしき山中を、
一人旅する此乙女、
素手に乗るべき代物かは、
唯力沙汰と立かゝる。
乙女はがばと身を起し、
こは聞譯なきしれ者よ、
女子と侮り無禮なしなば、
妾にも守る力のあるを、
いざや寄れあらびをよ、
秋の夜長のねむけざましに。
ふりの袂をまき擧ぐれば、
紅梅もるゝ雪の腕、
柳眉あがりて目は輝けり。
物な言はしぞひツくゝりても、
發矢組むを捕らへて犬ころなげ、
續てかゝるを車がへし。

横より來るは横腹を丁。
前よりかゝるは唯一蹴。
殘るはかなはず燕返、
おかしや散るは木の葉のみかは。

第三章

草枕故郷を雲の後に見て、
野に臥し山に泊る身は、
片敷く袖も露しけく、
なれてもつらき旅路哉。
御いたはしや歌方姫、
野武士の難を遁れつゝ、
奈須野が原を今朝ゆけば、
朝霧道を埋み來て、
葎よもぎふかる萱も、
亂る淺茅の露霜や、
森の下草うら枯れて、

殺生石のおそろしや。
風もあらぬにはら〱、
と袖に露散る紅葉葉は、
朽にし秋の時雨なるらん。
蘆野の里の露ふかく、
清水流るゝ柳かげ、
と西行法師の詠じけん、
野邊の柳は枝さびし。
野寺の鐘に夕暮て、
秋風寒むき白河の、
關をこゆれば月高く、
草の野原の霜白し。
日數程へて變事の、
世にみちのくの安達ヶ原、
鬼の住みきと言ひ傳ふ、
黒塚の岩屋見るに附け。

父の恨のしのばるゝ、
信夫の里のしのぶずり、
みだれ初ては今更に、
佐藤の庄司が舊跡も、
墜涙の石碑も、
我身の上とかこつめり。
野飼の駒を曳よせて、
乘れば蹄に雲やふむらん、
夢の間過ぐるみのわの里、
山陰の里、武隈の、
松に目さむる心地して、
馬よりおりて岸に立ち、
名取川にぞ出にける。
舟よ〱と呼ばゝれば、
おゝと答へて漕よする、
月の桂の河瀬舟、

棹さす人は誰ならん。
宮城野の萩の露しげみ、
十符の菅菰身にまとひ、
壺の碑左手に見て、
野田の玉川越ゆけば、
秋もやうやく暮近く、
森の木の間の夕月夜、
影さへ寒くなりにけり。
扨しも遠く來ぬるよ、
と都の方を見返れば、
白雲山を埋み來て、
故郷の空は影もなし。
あゝ思へば恨み父上の、
生ける死ぬるも白涙の、
胸には寄せて身を碎く、
涙は袖に沖の石、

人こそ知らぬかはく間もなく、
末の松山浪やこゆらん。
衣が關に宿かれば、
枕に通ふ松風に、
故郷の夢はさめにけり。
高舘の城の露ふめば、
昔の跡は夢もなく、
千草しげりて風寒し。
折しもあれやふりしきる、
雨は涙歟旅衣、
衣川邊に袖ぬれて、
そことしもなく分ゆけば、
野くれ、やま暮れ里くれて、
はや日も西に入日の里、
劍ケ峯の麓にこそは着きにけれ。

濱なでしこ

西島ゆき子

上

よべの嵐の名殘なく
　鏡の如き海原を
てらす朝日に見わたせば
　いとはるかなる江の島も
葉山の沖に釣すなる
　小舟の數もよまれけり
朝日はたかく照らせども
　昨日もけさも今もなほ
あさきりさらに晴れやらで
　ふじのね深くとぢこめぬ
あかぬおもひはしながらも
　袂すゞしき浦風に
折々よせて來る波の
　音きくだにもおかしきを
はるかに見ゆる三つ四つの
　木の葉にも似し釣舟の
浮きしづみやるながめさへ
　網もつ人はゆきかへど
魚とる爲か花のごと
　よせ來る波をこゝろなく
ふみちらしつゝ浦つたひ
　つたひてこそは歸るなれ
磯わのけしきかくばかり
　おかしきものをたれ一人
こゝろをとむる人なきを
　獨かこちつ行く程に
波うちよするまさご地の
　汐木のうへに誰やらむ

いこへる人をよく見れば
　つがねしかみのはら／＼と
風ふくまゝにみだるなり
　よしありげなる少女子の
いつひらひけん花がたみ
　かたへにおきつ櫻貝
梅貝角がひとり／＼に
　こぼるゝばかりみてゝけり
袂のうちをかいさぐり
　なさけのいろのいろ／＼に
にほへる花をとりいでゝ
　糸もてくゝり嬉しげに
『弟に一ついもうとに
　よき家づそよとく行て』
とらせやすらむうつくしき
　ゆてにはかたみ右の手は

花束もちつ行く人の
　やさしき心おもひやり
見えずなるまで見おくりぬ
　そとめに心うばはれて
たゝずみし間にあなわびし
　もすそはいたくぬれはてぬ
わびしきものゝ今更に
　せんすべをなみ立かへり
見ればいつしかわかうどの
　一人たゝずみ餘念なく
わがかたはらに來し事も
　知るや知らずや白波の
跡にこぼれしなでしこを
　手にとりあげて打笑めり
あやしきさまの見ゆれども
　濡れし衣のわびしさに

急ぎ吾家へかへりつゝ
　昨日のながめ忘れ得ず
其つぎのあさまた一人
　まだを暗にたちいでゝ
昨日のをとめなつかしみ
　つたひ／＼て來てみれば
あないぶかしや少女子の
　いこひし如くかたへなる
汐木のうへにたゞ一人
　をとめにあらで少年の
やすらひながら折々に
　はまなでしこをとりいでゝ
いとうれしげに微笑ても
　其次の日もつぎの日も
わがゐたうちは朝な／＼
　見えぬときとてあらざりき

風の吹く日も雨の日も
　汐木の上にたゞ一人
誰を待つらむいたはしや
　手に持つ花の色さへも
あせてはかなく散り行くを
　拾ひあげては身にそへつ
さきの日見しに引かへて
　物悲しげに見ゆめれど
訪ふ人とてはあら磯の
　彼方此方は小貝のみ
とりのこされてとり／＼に
　あぢきなき世をかこつらむ



可憐の少女

筑峯女史

さきつ頃東路を旅しける滊車の中にていとも憐なる話しをなんしける人ありけり。世の人々と憐みのこゝろを分たばやとて記し侍らんに、高崎てふむまや路にいと弱き同胞の歌女二人ありけり。元とその親は東都の人にていとゆたけかりつるほどに姉妹の者にさま〳〵の遊げいなどを教へ面白おかしく月日を送りけるに、實に人の身の上はあすか川の定めなく侍れば、いと大なる損をなし家倉までも人のものとなり、むかしの榮華も今は夢とさめ、たつきの道も絶え、いかゝせんすべもなく日毎にくるしさのいやましければ、かゝる親の常とてこの同胞のみめかたちいとうるわしきをこよなき事と思ひ、はらから二人にねむころに云ひふくめうたひめとなし、多くの金にかへ、遠き所ならば知る人もなく勤めよからんとて、高崎のある家に賣りにける。さるほどにはらから二人はこよなきかなしさも親の爲めとて雄々しくも高崎には行きつれど、いかにせんいやしきなりはひのかなしさは云ふも憚りある事まで爲させては買ひとりし者の利益もうすく、さればとて身を汚がすもうしとてやまひとなん云ひなして家の外にも出でざるより、遂には打さいなまるゝ事さへありて、そのくるしさとかなしさに今は耐へ難くなりしかば、はらから心を合せみそかに買はれたる人の家をのかれ出で東都さして急ぎける。彼の家にては常々乙女らに心してけるに、影見へざるをいぶかしみ、二人の滊車にのりたるを見たりと云ふ人ありしかば、早くも東都の上野なる停車場に電信にてしらせをき、二人まで付添人をなん差立てける。姉妹は上野に着きしも直ぐ巡査にとり押へられぬ。付添人は次の滊車にて參りければ、姉妹は再び捕はれ人となり、東都の土

もふみ侍らで又も滊車にて高崎の方へつれ行かれぬ。付添人も滊車の内なればとて少しは心弛みぬ。滊車ははやくも利根川になんかゝりけるに、滊車の歩み少しゆるみにけん、やはと呼ぶ聲の中に二人の乙女の姿は見へずなり侍りにき。付添人は大に驚き、こはいかにせんとあはてまどひにしもはや遲そかりき。二人の乙女を救ひ取らんとて滊車の止るを待かね、立戻り探ぐりしにこはいかに川水いたく涸れたる折なりしかば、白砂の上になきからはありしも高き所より落ちたる事なればたまの緒はとく切れ果てぬ。そい〳〵は世染まりたる人々もせんすべなくて遺體を持ち歸り野べの送りをなんしけるとかや。走る滊車の窓よりくろ金の橋桁の絶間をうかゞひ千尋の高き所より飛び下りしは中々たやすからぬ事にて、手弱めにしてかゝる最後を爲しつる其心根の雄々しさ、もしなからへつらんにはいと頼母しく侍んに、散りて跡なき利根川の水の藻くつとなり果てし心やいかにありつらんと、推しはかられて憐れなり。

＊　＊　＊　＊

これにつけても思ひ出でらるゝは人の親の責いと重き事にぞありける。乙女等が親もし其ゆたけかりつる時に其の子の行末の爲めに積金をするなどのそなへを爲し、あるは同胞が生計にこうせぬ爲の手藝讀書なんど教へをきたらんには、かゝるはかなき非業の事はなかりつらんに、あなおしや、あな悲しや、とりわけていかにまづしくなりはつるとも歌女なんどのいやしき業にその身をまづめ、又いかに親の爲めなればとてかゝる業に身を汚す事のなき樣にこそあらまほしけれ。このあはれなる同胞の事を思出しては其魂いかに迷ふらん其身のはかなさをいかに恨らんと思ひ遣られて、人しれず涙に袖をしぼる折もあり、もろ共に憐れと思ふ人もあらんかとてかくは記志侍る。

クルイロウフの寓意詩

笛仙子譯

クルイロウフの寓意詩は國民的の俗語を以て書かれたもので、其文は露西亞國民特性の反寫で、之を譯す事の六日敷のは、恰も露西亞國民の特性を説明し難きと同じです。曾て佛蘭西の文學會が彼の寓意詩を譯さんと、八九回試みた事か有ッたが、いつも立消になッたといふ程のものです。况はむや笛仙に於てをや、迚も譯す事は出來ません、唯此處には幼年諸君の友として、其意を譯す丈の事です。

猿及び目鏡

ある所の猿が年寄て目が弱くなりました。然し彼奴が人間から聞たには、なあに、目が弱くなつても驚くには及ばぬ、たかゝ老眼だ、大した事はない、目鏡さへあればお茶の粉だ、といふ事でした。其處で奴さん目鏡を買て來て、是さへあれば大願成就、と笑壺に入ッて喜んだが、扨愈使方となる、と人間に三本毛が足らない丈ありて、大きに困りましたね。で額の上に乗せて見たり、或は尻尾に結び付て見たり、或は鼻で嗅で見たり、或は舌で嘗て見たり、種々と工夫を凝らして見たが、何の役にも立ちません、で大きに腹を立ちて、勝手にしやがれ、此様馬鹿な！　人間のいふ事もいろ〳〵聞て見たが、毛程も爲めになッた事は有はしない、畜生奴（自分が畜生のくせに）と石を目掛て目鏡をばちり。投たからたまりません、目鏡は骨灰、微塵になッてしまひました。

然し情ない事には、此様事は人間世界にも澤山あります。どれ程益のある物を見ても、無學は其物の價を知らず、何でも其をつまらぬものにしてしまひます。世の中に怖いものは馬鹿と無學。

樫木の下の豚

千年も經ッたらうといふ大きな樫樹の下へ、豚がうろ〳〵とやッて來ました、奴四邊に落ちて居る鈍栗を見て、して來い、甘い物が有るなと大喜びで、無闇滅法に食ひ込みました、腹のはち切れる程つめ込みました。所が頻りにねむけざして來たので、奴邯鄲夢枕と洒落かけましたね。暫くしてぱッちり目を開きました、覺めたのです。扨さめて見る、と腹も少々北山時雨といふ儀です。さらば又鈍栗をしてやらうと其邊を見たが、もう落て居ません、如何しやうと少し考へて居たが、やがて奴の尖ッた鼻の頭で樫樹の根を掘り始ました。(如何いふ氣なのでせう？)樫樹の上から烏が聲をかけて、おい豚君、君は何だッて其樣に根を掘るのだへ、根が出たら木が弱はッて、仕舞には枯れて倒れるだらうに、と言ひました。豚は平氣で、倒れる？ 元より承知さ、樫樹の困るのなぞは百年も我慢する、予は鈍栗さへ食へば宜のだ、と答へました、其時樫樹が歎息して、馬鹿だなお手前は！ 鼻頭を上へあげて木根を掘上たら、予の生長を助けるとでも思ふの歟馬鹿奴！ 無學なる豚は植物生存の理を知らぬのです。

猿兒

親を思ひ子を懷ぶは蓋し天性乎、獨り人に於て然るのみならず、禽鳥獸畜も亦然るものあり。

聞説らく今は昔信濃の國なる片山家に獵することもて其生業としける人のありき。彼嘗て常の如くに林深く分け入りけるが、一の大なる猿の其兒子と戯れつゝありしを見出し、ねらひ定めてきつて放すに、銃聲一發、彼女(猴)は忽ちに梢を掴みし其手を放ちて地上に墮ち、彼女の兒子等は其ひまに何地ともなく逃げ去りける。

既にして彼女は早や彼が肩にありき。彼は彼女を擔ふ

て家路に向ひ、冬の日脚の短きに、山中の徑の長きをたどりければ、彼が其門邊に近く來りし頃は日は已に暮れぬ。

終日狩りくらしていたく疲れける上に、彼女を皮剝ぐべく寒き夜の中の適せざりしに因り、彼は彼女を凍らざらしめんとて之を其家の爐上に懸け置きぬ。而して身は其一室に臥しけり。

然るに夜はしん／＼とふけ行きて、窓に響きぬるこがらしの音さへ死し、天地方に物すごき沈默の手に封ぜられて寂たりし時、彼はふと目を覺ましてあたりを見るに、懸けられたる彼女の下には來りて幾多の小さき猿ありき。

斯くて彼は彼等が何事をなすかを見るべく猶其儘に打臥し居けるに、彼等は其小さき身を懸けられたる彼等が母に達すべく長高からしめんが爲に相重りぬ。而して彼等は相代りて其手を爐に炙りつゝ、以て其母の死骸の疵を煖めり。

知らず彼等は其小さき手の煖めることに由て、其母の死骸を前日の生きたる母に甦らしめ得るとせし乎。知らず彼等は其煖むることを以て、其已に切れたる玉の緒を結びとむるに最も恰當したる手立なりとせし乎。

流石に殺害を其業としつる彼獵人さへも、此の小さき小猿等を彈射する銃丸をは有せざりしと云ふ。猿兒且つ然り、況や人をや。

繪畫

丹青叢談（承前）

蕉隱生

十四、僧雪村姓は田村名は周繼鶴船老翁と號す常陸の人なり故ありて佛弟子となる、性畫を好みて法を洞雪

（洞雪は雪舟の弟子也）に就て學ひぬ、しかれとも雪舟の筆意を慕ふこと太た厚く自ら心に師弟の義を誓ひて行住坐臥つねに雪舟の畫を携へさるとなし、かくして熟視玩味して片時も身のほとりをはなさす、遂にその神髓を得て、人は雪舟の直弟子の如く思ひなすにいたりぬ、その山水の如きはほとんどその眞を亂るはかりなり、雪村郷にありし日家貧しきこと太たしく、竈烟も絶えかちなるにもとより肌暖かき布子たになし、あはれ、隙間漏る夜寒の風に幾夜の夢や覺ぬらむ。なす生活の道もなくてはかなはさることとなれは、自ら竹を削りて紙を貼り粗率なる團扇を造りて、そか上にさら／＼と草畫の不二山、奔馬、野菜のたくひを寫し出し市に鬻ぎて纔に衣食の資となしけるといふ、



十五、ある時加州侯その畫師佐々木泉玄（鶴澤派の人なり）をして巣ごもりの鷹の雙幅を畫しめんとて泉玄を召して命せられける且のたまふ樣もし圖案に困しまば、探幽のものせしものあれはそを見せしめんと、泉玄いなみて、それかしも意匠のあることとなれは御心を煩はしたまふまてもなし、たゝ願くはそれかしの畫の

出來上りたるうへにてその畫を拜觀せんといひ置き退り出で、まつおのか技倆の程をあらはさんずとて、いろ〳〵考ふれとも未た其趣向を得さるにあくみはて、一日鷹師それかしを訪ひて巣ごもりの鷹のさまなとを問ひたゝし且つ、圖の布置を謀る、鷹師のいふ、われもとより繪の事なとは露しらねとも、そこもとは、しはらく、それかしの言に從ひて少しもそこもとの意をさしはさむことなけれはわれその圖案のあらましを語らむ、泉玄もそのむねをうへないて、さて如何なる圖を起さんかと問へは、即ち雌鷹は巣にありて三の雛をはくゝむさまを寫して一幅となし、今一幅は雄鷹の山鴉を摑みて飛歸るさまを寫せよといふ、それより泉玄いくそたひ稿を更へ筆を改めて、經營苦慮のゝちいと見事なる雙幅を作り上け、侯に呈せしに大に嘉賞せられぬ、さて約束なれはとて探幽の古圖を見せられたるをみるに雌鷹五六の雛を養ふて、雄鷹は野鴨をとらへ來るの圖なりき、またの日泉玄鷹師に逢ひて此事をものかたりけるに、鷹師笑て凡そ鷹の卵は二個より過さるものなり、畫きの日、そこもとに三羽を畫かしめたるは、わか邦いにしへより四の音を忌み又偶數の嫌をさけしむるためなりき、かつまた鷹の巣に在る頃は首夏なり、しかれは野鴨なとの居るへき時にはあらし、探幽も未たこゝに考へ及はさりしならんといひしとそ、けに大家名匠も誤のなからずやは、

十六、池大雅は世にも軼事逸話の多き人にしていま一々詳にせは棟牛にも至るへし、大雅わかゝりし時馬術を習ふ其師のいはくそこもとら武士にあらすして騎馬の術學ひ得たりとも益なきわさならすや、されと旅遊ひなとせるゝとき足つかれなら馬にもまたかるへし、かゝるとき落る術をならはされは怪我なすこともあるへし、いかに落る術を習ひ給はすや、大雅こはよき事なりとて、からまり乘かけ二寶荒神三寶荒神なといへる

落かたをこと〳〵く學ひ習ひえて危難をのかれし事度



々なりと、又好て名山に遊ひ高峻幽奧いたらすといふことなし、まは〳〵富士に登りて、每に其路をことにして、富嶽の圖一百を作る、當時の畫家の及はさる所なり、大雅家甚た貧なりと雖も古書畫、金石骨董、畫史、書畫譜等にはなはた饒かりしといふ、今ゝ畫家の家富みなから、かゝるたくひのものに錢を投せさるものは恥つへきのことならすや、げに我邦の繪畫は大雅の出てしより一變せしもまたむべなることなり、

十七、曾我蕭白名は輝一、蛇足軒と號す勢州の生れなり、その畫は變化自在にして人その功を窺ふあたはす、草畫は藁もて畫きたらんか如きものあり、しかも精密なるものにいたりては餘人の企及し能はさるものあり、蕭白大雅堂と交り厚し、ある時大雅蕎麥粉を得たれは蕭白に約して、近きに來られなば製しまいらせんといふ、蕭白もとこれを嗜めは日ならすして東山に訪ひ、うちくつろきて、書畫の事なと談して時の移るも知らさりき、しかるにさきに約せし蕎麥のとは互にわすれはてけん、日既に晡なるころほひ大雅のいふ、吾いまいたく飢えたり、されはそこもともしからむ、ともに夕餉食んとて妻玉瀾に命して茗粥を出し、喫し終りて又もとの如く文墨風月なと語らひゐける、夜も

いたく更けぬれはわれははやまからむと蕭白立かゝるを、


蕭白

大雅見て、そこもとの歸る路この暗らき夜にては提灯なくてはかのふまし、されと吾家にこの具の貯なければこれを持ち行き給へとて圓行燈に蠟燭をともして送るに蕭白厚く禮をのべ蹣跚として歸り去れりといふ、



無聲詩話

（七）

斯くて後鳥羽の院より龜山院に至る鎌倉の盛時に、名高き藤原信實出でぬ。

信實初の名は隆實、隆信の子、左京權太夫となれり。其畫は父に學び又春日光長の風を慕ひて、頗る肖像を巧にしたりき。

彼はまた和歌をも能くし、京極黄門定家の友たり。龜山院の文永二年十二月、八十九にして沒す。

彼が畫は筆意深奥にして而も氣力ありき。人麿の像は其最も得意とする所なりといふ。又後鳥羽帝及び後堀河帝の御影を畫き、後鳥羽帝行幸の鹵簿順徳帝清涼殿の宴、三十六歌仙、畫師草紙等を畫きし事あり。其北野緣起の畫は稀世の珍寶として世に傳へられ、簫の岩屋の地獄變相圖の如き亦觀るものをして粟肌に生ぜしむ。

其曾て蓮生法師が八十を壽したる詠に、

わがよはい君が八十におよぶてふ
猶ゆきつれの千世をまちける。

以て其風藻を察するに足るべし。



而して土佐家にては光長の子經隆中務大輔畫所預となり初め春日と稱せしも、土佐權守に任じ、是より土佐を以て氏とするに至りぬ、後堀河帝の寛喜中に沒せり。

かの蒙古襲來の圖を畫きしは其子長隆にして、孫隆兼は春日驗記加茂祭等を畫けり、法然上人畫傳四十卷は長隆の弟吉光之を筆す。其子行光光顯曾孫行秀等下て南北時代の名手たり。

要するに土佐家は朝紳の畫家たるを以て、其畫風も自ら優長に、畫く所亦公卿殿上の事より緣起風俗戰爭圖等、純ら日本的のものなりき。

家政

小兒の刑罰につきての父母の心得

母は裁判所、父は大審院

人の父母たる者は誰も逃かるべからざる難問を持てり。そはその子を罰するに當りて、己が判決の適當せる

や否やを知らざるべからざる事なり。大凡何れの家にても父は終日他行せば、小供の裁判は、殆ど母一人の責任にして、日々の難問の多くは母に落ち來り、最も大切なる事のみ、父の考を煩はすを常とす。大切なる事をさばくは困難なる樣なれども、其實小事と雖も事々に正しき裁きをなすの困難は小ならざるなり。若し母が一時の怒りより、不當なる懲らしめをなす時は、小供は父なる大審院に上告するの心を出だし、是れよりして



母を輕んじ、母を忌むにも至るべければ、小供の惡習慣を匡さん事は、母のために尤も困難なる業たるなり。

罸の消化法、道德の胃病

人の胃は限りありて、過分の食物を取る時は、消化せざるのみならず、過食習慣となりて、胃の膨脹病となり、遂に自分の過食せし事すら分別するを得ざるに至る。道德上の胃病も、我等が屢々實見する處なり。初めは虛言を惡しき事と思ひながらも、屢々虛りを吐く時は、遂に習ひとなり、虛と思わずして虛を吐き、若しくは虛はるまじと願ひつゝ思わず虛を吐くに至る。かくの如く母が一時の怒りに任せて、正當不當を顧みず、無暗に小供を叱り、善をなしても叱る事あり、惡をなしても叱からぬ事ある時は、小供は道德の胃病となり、善惡の消化力を失なひて惡をなすも自分には判別すべからざるに至る。されば大切なるは、小供を罸する前に當りて、能く小供に、その罸する所以を語

り聞かせ、慥しかに自分の惡かりしとを覺とらしめ、此くなせばかゝる罰を受けざるべからず、かくなせしは自らの過ちなりしと、能く了解せしめ、然る上から適當の罰を能ふべし。

罰とは何ぞや

罰は何ぞや、罰とは父母の腹いせをなすために、小供をいぢむる鞭にもあらず、罰は小供を恥しゝむる藥にもあらず、たゞ小供の將來を正道に引き返さんため、助すけのために與ふる杖なるのみ。自制力のなき小供をして、惡事と云ふものゝ苦しき事、間違ひたる道は如何につらきものなるかを明瞭に知らしむる支へ柱にして、再ひ過またんとする時に、自ら顧るの力を添ふるものなり。故に若し小供の合點の行かざる罰の度々に重なりて、罰の目的にはづれて、過度なる時は、こたびは自分にて自分を慰さむるの方法を考へ出し、彼の強情を以て母を苦しめ、以て何分か自分の慰みとなすに至る、甚だしきに至りては、彼の事に叱かられし變わりに、此を爲さんと反動力を以て、甘むじて惡を爲すに至る。之に反して母の罰當を得る時は、小供心にも、善の善なる事と、惡の惡たる事とを識別して、惡を繰り返す事を恥じらひ、且つその苦しきを思ひ出し、良心より出づる清き流れに隨ひて流るゝに至るべし。

罰とは矢たらに小供の肉體の苦しみを與ふるものを指すにあらず。小供の罪を犯せし時は、母は温言を以て、和らかにその良心に訴たへて、自ら良心の裁をなさしむべし。目付け、鼻付け、一にも、二にも、こらす時は、弱き心にひがみを生じ、良心の命令を聞くの暇を失なひて、たゞいぢ惡ろき小供となるのみ。例へは今母の針箱に觸れんとする小供あり。教育心得なき母は、忽ち大聲を出して走り來り『なぜ針箱をいぢるのだよ、いぢつてはいけないと云つたではないか、聞かないとこうだよ』と小供の手をつめり、小供はい

たい〱と啼くのみにして、何故針箱に觸るかわしきを知らざる故に、遊び道具のなき時には再び針箱に觸るゝに至る。之に引きかへ心得ある母は自ら行義正しく坐せし前に靜かに小供を召し寄せ『それをいぢると、此樣に針が手に刺さつていたくなるよ、聞かないでいぢつてはいけないひと云のですよ、今度いぢるとおつかさんが針てこうするよ』とて、輕く針にて痛みを與へ、針箱に觸るゝか害なる所以を知らしむれば、大概の小供は再び手を觸れんとする時、いたくなるよの聲と共に、直ほに母の命に隨ふものなり。事の起りし時にのみ小供に敎ゆるのみならず、母たるものは、暇あれば兼々小供に道德の語、英雄の傳等を語り聞かせて、その德性を養ふを最も必用とす。通常の時はなるべく言を以て敎ゆべけれど時に身躰に痛みを與へざれば、隨はぬ時あり、その時は再三自らも顧み、己が所置の適當なるや否やを考へし上にて、小供を愛しつゝ、罪を惡みつゝ、小供の爲めとなるべき所置をなすべし。

如何にせば適當の裁判をなし得べき

されば如何にせば、適當の所置を爲し得べきと云ふに、父母が精密なる注意を以て觀察し、忠實と愛心を顯はして、裁判をなすにあり。精密なる觀察を要する故は、父母が注意足らずして、小供の惡しき事を爲すに心付かざる事ある時は、小供は意外に賢こきものなれば、萬一を僥倖して、父母の目を盜み、一時のいたづらを爲さんとの判斷よりして、隱れつゝ良心を欺むき、惡をなし、遂に善に弱くなるに至る。故に小供に辛いと、甘きと、熱つきと、冷たきとを知らしめんとならば、常に精細なる注意を以て、小供の行爲を注目するを要用とす。

罰の種類

罰の種類と云ふ事は、又た一つの難問なり。或る人は幽靈を以ておどし、ある人は巡査を以ておどし、ある

ひは醫者、或はおきう、中には打つもあり、つねるもあり、倉に入るゝもあり、食を與へぬもあり、十人十色なり。その何れか尤も正しきかを判するに當り、先づ考ふべきは、小供は誰れの支配すべきものなるやと云ふ問題なり。巡査を呼び、醫者を呼び、幽靈を呼ぶは、必竟父母の權力の弱はくして、小供を支配するに足らざるより出づるものなれども、小供は巡査醫者幽靈の支配すべきものにあらず。そを養育すべく命ぜられたるは、たゞ父母あるのみなれば、決して他の助を求むべきにあらず。一方に父母の權を顯はし、一方に小供の眞心の命令を呼び起こしつゝビシ／＼と叱かるべし。之を爲すには平生間違のなき裁判を以て、小供に得心せしめ、父母は正しきもの、父母の命は隨ふべきものなるを會得せしむる事と、平生つまらぬ事に、かや／＼と叱る事になり、小供をして立腹して、いやみを生じ、所謂耳にたこの生ぜしめざるを以て肝要と

す。

こはたゞに消極的の害あるのみならず、一方にはたゞならぬ積極的の弊害の伴なふあり。即ち幽靈を以て嚇す事は、小供をして神系質とならしめ、暗き處、大なる聲、寂びしき所、何にかきらす恐怖せしめ、巡査を以て嚇す時は、正道を蹈んで恐るゝ處なしと云ふ獨立せる志を失なわしめ、醫者を以て嚇す時は眞の病氣となりたる時に、醫師の診察を厭ふて、大患となるも、適藥を得る能はざるの不幸を來す。

さればきうを用ひ、或は打ちつねり等を爲すは、如何にと云ふに、逃げ廻る小供を捕へてきうをすゆるは、小供をして殘酷なる心を起さしめ、打ち處の悪しきによりても、又た健康を害せし者少なからず。殊に過酷なるこらしめは、無邪氣の小供に燒氣を起さしめ、返て父母をうらむの念を起さしむるの恐れあり。

さればとて、食物を與へざるは、通常の人情を有する

人の爲し得べき事にあらず。それのみならず、こは已に言わずとも教育ある父母の知る所にして、一度の食物が、如何に小供の身躰榮養に關係あるかを知らば、これも又た爲し得べからざるの罰法なり。然れば如何にせばよからんか。

（未了）

育兒注意

ある醫者は人類萬病の元は歯にありと云へりそは餘り言ひ過ごせし様なれども人は歯を損して胃を損し腸の病ともなり脳の病ともなり果ては立つ能はざるに至るものも少なからざれば歯を注意するは肝要なる事なり殊に小兒の歯は一生健康になるも一生を不健康に墜らしむるも此の時にあれば親たるものは一層の注意を要すべし

乳歯發生期

小兒の生れてより五ヶ月六ヶ月にして顯はるを門歯とす側切歯とて前歯の次にある歯は七ヶ月より十ヶ月迄の間に生し犬歯は十四ヶ月より二十ヶ月迄の間に生し第一臼歯は十二ヶ月より十五ヶ月迄に生じ第二臼歯は十八ヶ月より三十六ヶ月迄の間に生す此れ等の歯は生長するに隨ひて一度拔けをち初めて永久歯を生ずるなり永久歯の生ずる時期を知り能く注意して乳歯を去らざれば歯並を害しらんぐひ歯となるべし

永久歯發生の期

第一永久歯の大臼歯は五年より七年迄の間に生し中心切歯は六年より八年迄の間に生し側切歯六年より九年迄の間に生し第一小臼歯は九年より十年迄の間に生し第二小臼歯は九年より十二年迄の間に生し犬歯は十一年より十二年迄の間に生し第二大臼歯は十二年より十三年迄の間に生し第三大臼歯は十七年より二十年迄の間に生す大凡永久歯の生する時期に至れば乳歯は自然

に抜け落つべけれど時に由れば固着して落ちざるものありその時は指にて能くゆさぶり然る後抜き去るべし

歯の磨き方

小兒已に四才にもならば極柔わらかきようじを以て歯を磨く事を致ゆべし凡て齲歯は歯の掃除を怠り或は熱きもの冷めたきものを用捨せずして食する等の不注意より生ずるもの多ければ小兒の時より之を注意し食後には必す微温湯にて漱がしむれば一生歯牙を害ふ事なかるべし又た通常歯は左右に磨く人多けれども上下に磨くを歯のために最も良しとす又歯磨は粉の細末なるものを擇ひて用ひざれば大に歯の質を害する恐れあり

歯痛の藥

若し已に齲歯となりて痛むときは其穴を清淨になし之にケレチソート或はコカインを綿に混して穴に入れば一時の痛は去るを得べしもし度々痛む時は抜き去るか醫師の治療を受くるを良しとす

貯藏法

牡蠣の酢漬

先づ百個計りの牡蠣の水氣を去り清水にてよく滌ぎ鍋にいれ其中へ塩少しと酢壹合五勺とを加へそのまゝ火にのぼせ大抵十分時間程かきまぜ上面に浮ぶ泡沫をすくひ去り頓て牡蠣を取出しあとへ胡椒又は丁子などを適當に入れて再び煮ること五分時にしてよくかきまぜ前の牡蠣をいれこれを壜又は鑵につめて貯へ置けば何時迄も風味變らずしてめづらしきものなり

魚の砂糖漬

魚を割き其筋目へ一面に砂糖をつめこみ其儘にて二三日平均なる所に置き砂糖浸み燥きたる時之を拭ひ黴の生ぜぬよう空氣のよく通ふ所にいれ置くべし大率魚五六十許に砂糖一握にて充分なり又之と同じ分量の鹽を

混ぜて用ゆるもよし但し砂糖は少し赤みあるものにてよろし

魚のでんぶ

何魚にてもさつと瀹あげ能く水をさり箸にて細末に碎き骨をさり平鍋に盛り至つて弱き火にて熬るべし水氣去るに從ひて自然と雪花の如くなるなり其節燒鹽に白砂糖を加へ味を付くべし

茄子の年中漬

茄子も最早終りとなりぬ之を年中漬となすには今を過すべからず色よき茄子を毫しも濕さずして青砂に鹽を混和し桶の中に漬け蓋に目貼をなして貯へ置き必用なるときに鹽出をなして用ゆるなり

寒中に青瓜を見んとせば

寒中に雪壹升に鹽三合の割合にて煎し壺に入れて貯へおき夏の比瓜を二つに割り瓤を去りて其水に漬けおくときは翌年の夏迄も保ち得るなり

栗の貯藏法

栗を壺に滿て口をはりて塞ぎ地を堀りて之を倒に埋めおけば翌年まで味のかわることとなし

もしまた萠芽を生ずる憂あるときは萠芽を生ずる部分へ燒鏝を當て壺につめ其口に嵌る程の土器を求め中心に栗の出る程の孔を明け之を壺口に嵌め倒になして土地につけおけば芽生せずまた赤土を器にもり其中に埋むもよし

秋菊を春迄貯へんとならば

黄菊を貯ふるには秋季半開にして生氣强き菊を摘みおき箱中に寒天を流し凝結させて後菊を植え込み蓋に目貼して貯ふれば春に至るまで損せず

料理

こち飯

こち飯は花の如く雪の如く見へて美はしく味ひて甘味

例へん者なし、その料理方を心得をかんには客を饗應なすに當りて大に便利を得べし。扨その作り方は成るべく肥へ太りたるこちを擇び鱗と腹わたを去り能く洗ひ然る後沸騰せる白湯の中にいれ煮の通りたるとき引き上げ二枚の板に挾みて水氣を絞り骨と皮とを精密に去り取身斗となりたる處をはしにてよく碎けば落花にあらされば積雪かと疑ふ計りの純白にして美はしき者となる。さて之を皿に盛り別にかつをぶしのだしを用ひて作りたる汁の中に牛蒡蕪菁葱等の具を入れたる者を碗に入れて先きの皿にそへて出すべし。食する時には温かき飯の上に先きこちを上せその上より汁をかけて用ゆへし。

小倉蓮

蓮の料理法に小倉と稱する一法あり。その製法は赤小豆を一夜水に濕しをき翌日碎けぬ樣にうで然る後蓮を生にてをろし之にうどん粉少量と砂糖及び鹽を入れ宜き程に加減し之れを先きのあつきに混じ丸くなり角になり結ひて蒸すなり。またきりてかしわんちやわんの具に用ゆるもよし。

うれし野

芥子の粉に砂糖少しを加へ、酢にて堅く揑ね、鹽に漬けたる青紫蘇の葉にて圓く卷き、おしをおくべし

甘藷にて水飴を製する法

甘藷一貫目の皮をはぎ、薄く切り、水に漬けておくを脫き、後釜に入れ、飯を炊く水加減にて煮えたる處へ、壹升の麥芽を末になし、水に溶して混ぜ、二時間程蓋をなしおき、やがて之を布袋に入れて絞り、其液汁を復釜にて煎つめ、赤色になりたらば、杓子にてよくかきまぜるときは、次第は粘出て、遂に飴となるなり。此飴は尋常の飴よりも佳味多し。モヤシは飴を製する客に至れば何程にても粉となせしものを分ちくるべけれど自宅にて製せんとならば温き所へ莚をしきその上

へ小麥をひろげ小麥の上より水をかけその上より又莚を以て蔽ひをけば温かき時候には二三日にて芽を出すべし。之を能く干してうすにてひくなり又注意すべきは其芽の出でざる前に度々之を攪き廻さゞれば芽に先ちて根出でかて芽の發生を害すべし。之は夏の頃に製することと最も大なりとす。

蛤の味噌（桑名の名物）

蛤の時候とはなりぬ。その味噌を作るには之よりを好時期とす。其製法は蛤のむき躰を笊籬にてよく洗ひて砂を去りから煎をなして水氣をとり、味淋酒少しと醬油にて塩梅し、煎りつけ、極上等の赤味噌を適當に入れ、銅鍋にて遠火にかけ攪混ぜながら煎つめ、冷して器に盛るべし（好みによりて割山椒をいりてふりかけるもよし）。これは伊勢桑名の名物なれども手製の方却て味よろし。

婦人職業案内

「メリヤス」編

「メリヤス」編は、襯衣より手袋、靴襪、手甲、其他半襟に至るまで頗る需用多きものなれば、随て府下に「メリヤス」製造所も多く其內職の數々も多端なりと知るべし、

府下の「メリヤス」編製造問屋は其組合事務所を日本橋區村松町に置き、「メリヤス」業に係る一切の事務を扱はしむ、此組合事務所の重なる事務は、「メリヤス」編の賃銀を一定して濫賣濫製なさゞる事と、製造元に於て職工を虐待せざる事と、職工等の不品行を矯正するの取締を扱はしむれども、これは重に製造元と職工との關係を規定したるものにて、內職人の上に關せず、又其仕事に於ても職工と內職人との間に差違あり。職工は重に男子にして其中に女工あれども、女工は男子

の如く激烈の勞働（機械を運轉する）に堪えされば僅に靴襪を製する位なり、かゝれば賃銀に於ても多くの差を生し男子は大低一個凡七圓五十錢位なれども女子は其六分即ち四圓五十錢內外なり、併し之は內職にあらず一人前の職工としての賃銀と知るべし。

而して各製造元より出す內職は製造にあらずして、職工によりて製造せられし物品をかゝり合する手仕事なり、玆には職工の製造事業は詳記せず、內職仕事の二三を擇みて職業に志しある妹姉の參考に資せんと欲す。

靴襪――これは靴襪の口の處と爪頭の處をかゝる、一「ダース」夏季は四錢五厘冬季は五錢五厘、細地物に至りては夏冬共に一錢增、但し普通の人にて一日一「ダース」巧者は二「ダース」半。

手袋――夏季は五錢冬季は六錢より六錢五厘、細地物に至りては九錢、一日普通の人半「ダース」巧者は二「ダース」なれどもかゝりつけ最も六かしく殊に指の股などは精巧を要す。

改良手甲――これは口と竪とをかゝる、一ダース三錢より三錢五厘、普通の人にて一日一「ダース」半巧者五「ダース」。

丸手甲――これは丸織ゆゑ奥と口元とをかゝる、一「ダース」小四錢より四錢五厘中は小に五厘增大は中に五厘增、普通の人一「ダース」巧者三「ダース」を製し得らる、始めて試むる稽古中の者は右の賃錢より五厘乃至一錢を減すと知るべし。

府下の各製造元にては右の賃銀より多少の高下はあるべし、併しながら右は其標準の賃銀を示したるものなれば、有志者は最寄の製造元に就き玉はゞ詳細を知り得らるべし。

此內職は隨分細密を要するものなれば婦女子の仕事には最も適好なり、最も適好なるのみならず上品なるも

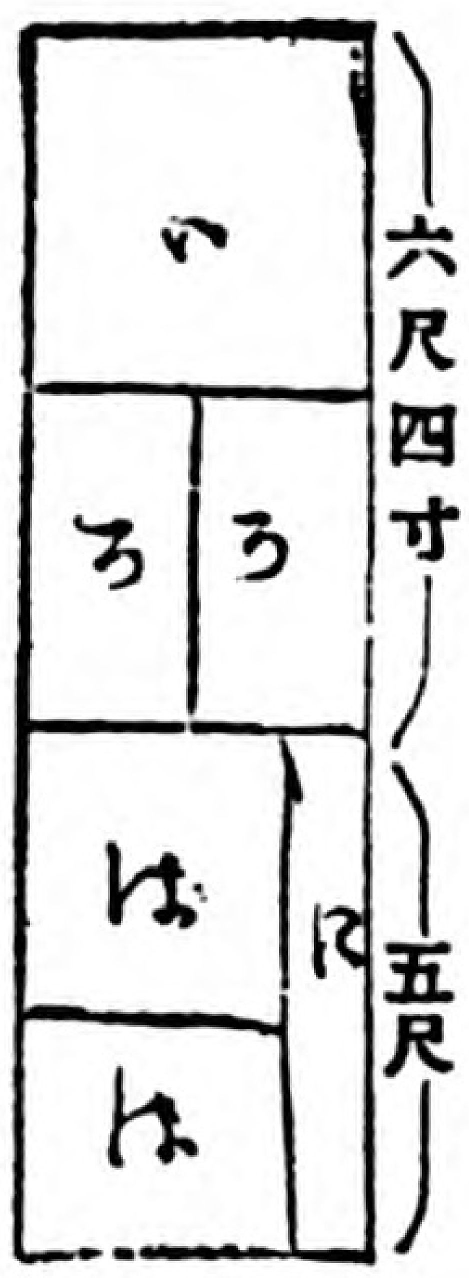
のなれば賤女も貴人も貧民も富者も之を試むべし。手藝を爲すは啻に金錢を得るのみならず、併せて金錢の價値を知り、一錢の錢にても活用するを知り、一厘の錢にても儉約するを知り、且つ他に對する勞働の眞味を知る同情の念を發すへし。

手藝案内

嬰兒の衣服

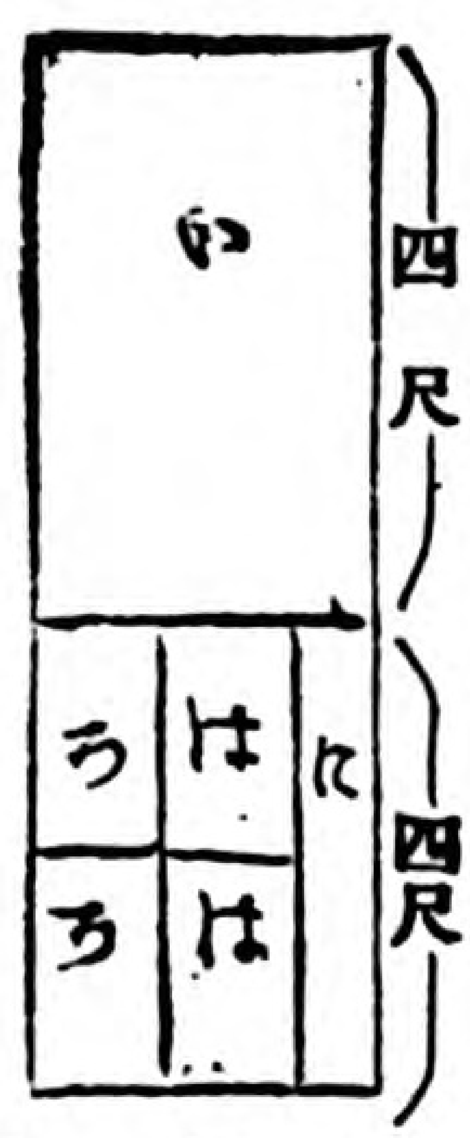
生れて當歳より二歳位迄の嬰兒が着る一つ身の衣服の裁方を記載すべし、一つ身の裁方には二方あり、一は一丈二尺の布を以て、一は八尺の布を以て一領の兒服を製し得べし、即ち一丈二尺の裁方は甲圖の如く(い)の

甲



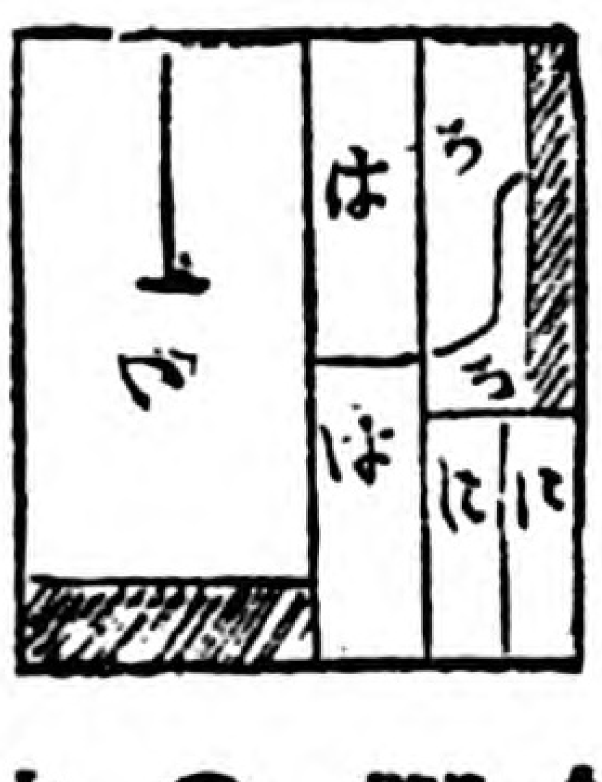
「みごろ」を二尺四寸とし(ろ)の「おくみ」は二尺を裁ちて其木綿巾を二分して兩「おくみ」に用ゐ(は)は殘餘五尺六寸を二分して兩袖に用ゐ、其木綿巾の内より(に)の二寸巾の襟を取る（但し裏襟要らず、即ち折返して一寸巾の襟となる）かくして裁縫されたるものは丈二尺一寸五分のかはゆき衣服を得るなり、又八尺の布を以て製せんとならば先づ八尺の布を取りて之を

乙



二分し其一半を以て(い)の「みごろ」を取り（襟肩を開くべし）其殘餘の四尺は其木綿巾より(に)の襟一寸二分を裁ち去り（素より別に裏襟を要す）其殘餘の木綿を兩分し、一半を以て(ろ)の「おくみ」二個と(は)の袖二個とを得べし、斯くすれば仕立揚一尺八寸位の衣服を得、さて

丙



今一個の裁方則ち二尺巾の裁縫に至りては丙圖の如し(い)は則ち「みごろ」四尺二寸、襟肩を七分に開け、(ろ)は

「おくみ」として一尺九寸五分（但し褄下は一尺巾三寸五分）（は）を兩袖各々二尺四寸として巾を六寸と裁ち、其殘餘の（に）と（に）にて襟を取り脊の處にて繼き合はせば二尺巾四尺八寸を以て製したる仕立揚は丈二尺一寸袖一尺二寸の小兒服を得らるべし、これを大坂裁ともいふ。

襁褓と「セフチー、ピン」

筆の序に襁褓の事を記さん、これは大抵多くの人の知るが如く日本人が常に用ゐるものは長方形の古布帛を閉ち合せたるものなり、古布帛にても宜しけれども、能く清潔に洗濯したるものを撰み且つ白布、又は大人は「シャツ」に用ゐし白「メリヤス」の古切にても可なり、成るべく柔軟にして白色なるを宜しとす、（黑色は洗濯等を疎慢に失する恐あり）而して嬰兒は水漉器の如く常に二便を漏すものなれば、之を防ぎて尿屎をして他に漏らさざらしめんとならば下圖の如く「セフチー、ピン」を用ゐて襁褓を緊縮せしむるを要す、即ち四方形の襁褓を取って嬰兒の股間に當て、其の三角の邊隅（い）（ろ）（は）の處に「セフチー、ピン」一本宛を刺し止め置かば、曾て二便の外漏して衣服等を汚穢するの虞なし「セフチー、ピン」は價最も廉なるものにして西洋小間物屋に行かば直ぐに購ひ得らるべし、但し此針の用は啻に襁褓に用ゐらるゝのみならず、「シャツ」の襟を止むるにも、乃至衣服にも用ゐなば、小兒等には衣服の委披するを止めて寒侵を防ぐに便あるべし、



毛絲製の涎掛

毛絲にて涎掛を製するは左程六ケしきものにあらず、其編方には種々あるべけれども今其單純なる一法を記せば、前號の紙上に記述したるが如く、毛絲細工の土

臺となるべき一個の連鎖を造ること上圖(甲)の如く、



甲

普通のものは連鎖編の目七十前後稍大なるものにて八九十位を製作し、此連鎖により小兒の首に纏ふべき處より編み始め、此の編の目毎に鈎編を爲す、鈎編には色々種類あるべけれども、鈎編を編むは最初の一段に於ては連



乙

鎖の輪毎に一ッ宛を編み、二段目は二ッ宛を編み三段目には三ッ宛を編み斯樣に編數を增して十段より十一二段位に編むべし、併し五六段まで編み行かば恰好を見計の上それにて充分の廣大を得たりと思はゞ最早編數を增すに及ばさるなり、但し毛糸の色合と編方とは人々の嗜好に任せて可なり。

社交一斑

西洋禮式一斑

YH子

名刺

名刺は活用すれば成分人一人前の代理を爲す場合尠からず、最も注意すべき事也、

名刺の種類——訪問の名刺は美しき洋紙或は透明なる洋紙、其質は堅硬、其形は豐富なるを要す、然れども葉書大の山師的名刺は宜しからす。磨きたるか如き光澤あるか又は青貝の如き色ある名刺を用ゆべからす、且つ名刺の緣に金色を帶ぶるものも宜しからす（本邦人には歷々之を用ゐるものあるを見る）名刺の四隅に黑線を施したるものは喪用と知るべし。名刺には名頭字（たとへば西郷隆盛ならば T.S とするが如く）と職業とを肩書して差閊なし。夫婦各別の名刺を有すべし、或時は合同のものを用ゐて妨なし。結婚せる婦人は名を書するに及ばす。

名刺活用の場合——通常人家を存問するには一葉の名刺を發す、然し

佛國にては男子は其訪ふ所の家内の男女の員數丈名刺を置き、女子其家の婦人の員數丈名刺を置くの風あり。宴會の招待或は禮物を受けたる時或は婚禮、死亡、出產等の告知狀を受けたる時或は一家の吉凶の通知ある時或は出立又は歸宅の通知を受けたる時は、物品を贈らざるも必らず名刺を送くるを要す。出發の時の名刺は告發と書す。新年の名刺には「賀新年」(Happy New Year)と書す。人を訪ひて家主不在なる時は名刺を左の如く折り置くべし。



日本人の名刺なれば上部を折るべし、死亡後弔問の訪問に在ては左の如く名を折るを要す。



但し日本人の名刺なれば下部を折り又は破りて差支なし。尊貴の人に名刺を送るに郵便にては宜しからず、必らず自身にて持ち行くべし。男子招に應じたる時は其翌日名刺を送るを要す。

贈物

通常の贈物は砂糖菓子や花束（種々なる花を集めて一團の花束を造る、西洋諸都府には花市場なるものありて、可憐なる女兒等製造して賣捌く）なり、これは我國の鷄卵や鰹節や三盆白の如く多くの場所に進物として贈遣す。進物を受けたる時は直ちに之を開き其物の好否に係はらず賞讃して感謝すべし、其禮物砂糖菓子なる時は其家に居合す人々に分配すべし。結搆なる進物を贈らんとする時は自身にて之を携帶くよりは寧ろ名刺と共に訪問前に之を送り其後に行くを宜しとす、「クリスマス」（耶蘇誕生日）には匕や「ナイフ」や、時計や、「カード」や十字架や人形の如きものを贈る。新年進物（年玉）は尊貴の人より卑賤の人に與ふるを可とし、非常の場合にあらざれば尊長に物品を呈するは不可、又新年の進物は早きを可とす、餘り遲延に失すれば他より到來物と疑はる。新年の進物には時計や、玩具や、流行の器具や、其他匕や、「ナイフ」の如き日用品を贈るも可。下賤の人には金錢を贈るよりもまた所持せざる必用の物品を贈るを可とす、何となれば下賤の人は往々金錢を濫費するの恐あり。商家の主人は其雇人の職務の勤惰によりて金錢を贈りて之を賞す、雇人は主人に物品を呈する場合なけれども、或る禮式に當りては雇人等醵金して高價の物品を進呈するは佛蘭西邊の商家の習慣と知るべし。

花

花は西洋人が最も尊み且つ常に進物に用ゐるものなり、たとへは吉事に於ても花を飾り名譽に於ても幸福に於ても滿足に於ても乃至喪事に於ても花を用ゆ、前にも言へるが如く西洋の各市府には盛なる花市場ありて男女貴賤雜沓頗る盛觀を極む、而して花には各意味あり、之を以て情意に換り言語に代表せしむ、此故に處女の飾るべき花と否とあり又妻婦の帶びて可不可の差別あれば、此辨識なし猥に花を贈りて人意を損する事あり宜しく注意すべし。

花の意味――百葉薔薇は兒童の愛敬を意味し、白薔薇花は潔白、薔薇の莟は幼弱、卯の花は幼年、葉鷄頭は春と友情、白百合花は純粹、是等の花を妙齡の女子に與へば他の嘲笑を受く、菫菜は謹厚謙讓の意味あるを以て凡ての女子に適す、橙花は妻婦に可(貞節)又桃色薔薇花や、黄薔薇、桃花、(情愛)も可。眞紅の花は妙齡の女子に適せず。其他鳳仙花、水百合花(淡泊)。水仙、向日葵(痴愚)。忍冬、爬草、仙人草(愛着)。老虎耳、山芹菜(信仰)。金雀花(家健)金盞花(嫉妬)。桂樹(勝利凱旋)。橄欖と柘榴(和親平和)黄石、龍膽(威權)黄百合花(虚飾)。山躑躅(寡婦の表號)等夫々意味あれば必して用ゐべし(但し本邦の花草のみを撰みたるものなり)

夏に花園に植ゆべき花と人に贈るべき花束とを記せば、

丁字草は贅澤、欝金香は華美、李花は富貴、紫蘇は貧乏、夕顔は脆弱、野薔薇は嫉妬、秀は不德、黄楊は堅固、狗骨は防禦、蘆草は從順、三色菫菜は離別を惜むの意なり(之も同じく本邦に知られたる草花を撰べり、他國のものは畧して記さず)。

流行の栞

春汐

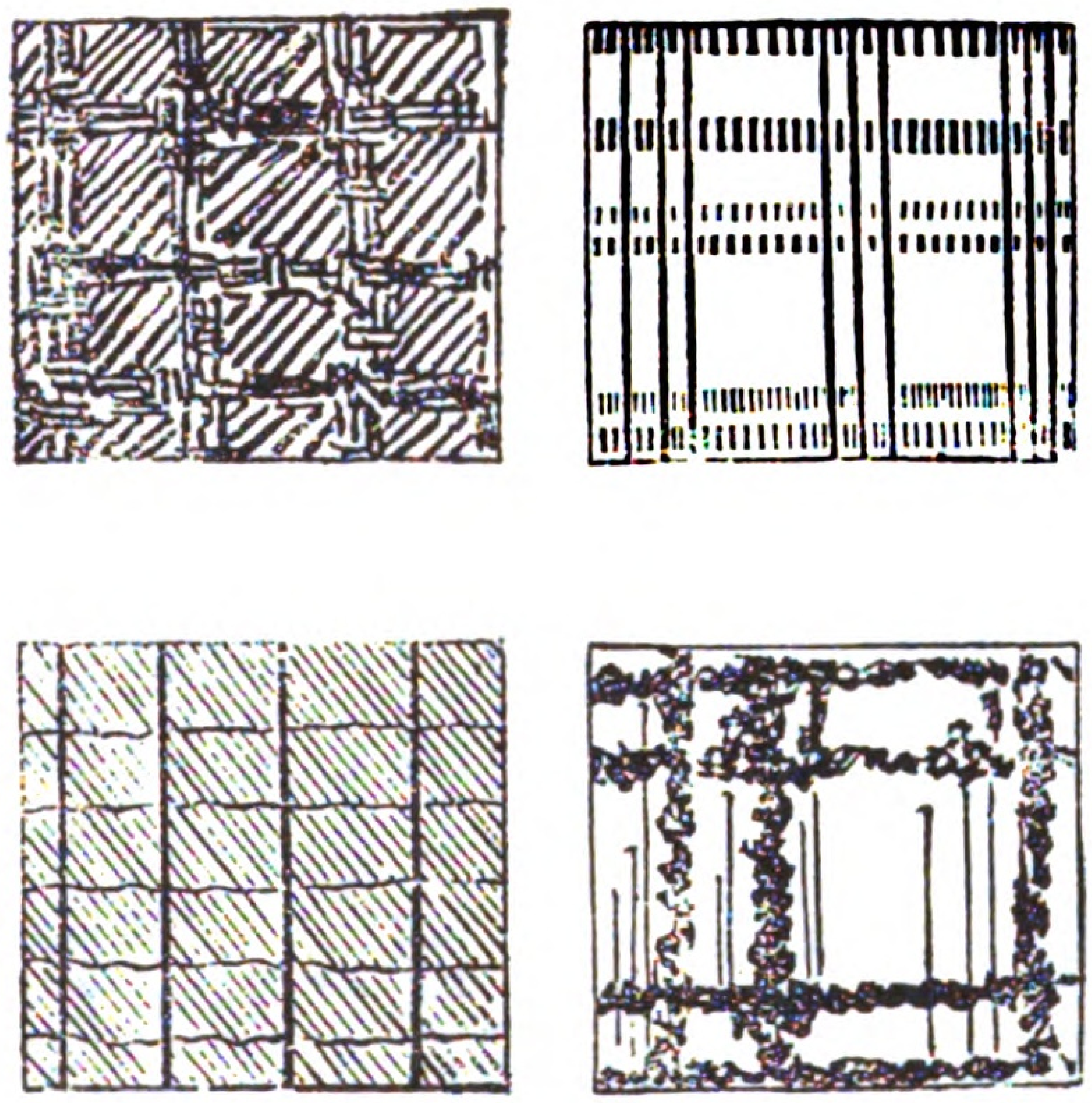
洋服

一般の實行に至りては過春と敢て異る所なし、流行の格好は昨二十五年十二月十五日發兌に掲載せし風格と大差なく、價格は銀貨下落の爲め一割以上の騰貴を爲せども、勉強する店にては需要相場の如何に係はらず、一人にても得意の客を得んが爲に薄利に賣捌き、寧ろ幾分の安直に傾きぬ、さて其流行形と價格とは

「モーニング、コート」――上二枚を黒綾羅紗、「ヅボン」を淺茶、鼠の竪縞として稍大き方、襟明き即ち胸部の明きの廣きを好む(價格十四五圓上等二十圓内外)

「フロック、コート」――地は黒綾羅紗にして何れも三ツ揃に調製すべし、流行形は前記「モーニング、コート」と同じく「ヅボン」は大きく且つ襟明は廣きを宜しとす(價格十八九圓最上二十三圓)。

背廣――形は上着の前角形流行、地質は淡鼠或は淡茶の格子縞の類



紗三揃（「スコッチ拾圓より拾二三圓、上等に至りては十五六圓）

「オーヴワー、コート」――相變らず丈の短き方流行、地合は例の無地羅紗にして、色は淡茶、淡鼠に限れるが如き觀あり（普通十二三圓、上等十六七圓）。

和服用外套

玆に圖を添ゐて紹介するものは、日本服の上に着用する鳶形の外套なり、四五年前迄は暖氣を保たんが爲め即ち衛生的に着用するものゝ多かりしが、近頃は頓と裝飾的に用ゐる人多きやうに見受けらるゝなり、而して其最も流行形は圖に示すが如く寛形にして背面に襞を



つけて歩行に自由ならしむるは格別の工夫なり、且つ其最も現時に行なはるゝものは普通物は縞「スコッチ」又は縞羅紗にして、地色は茶、鼠、縞は格子最も流行、次は上等品にして縞綾羅紗若しくは茶、鼠、無地の羅紗とす、而して裏地は並等の品には毛繻子の鼠格子縞を用ゐれども上等品に至りては甲斐絹の縞、或は紺無地を可とするなり、（價格上

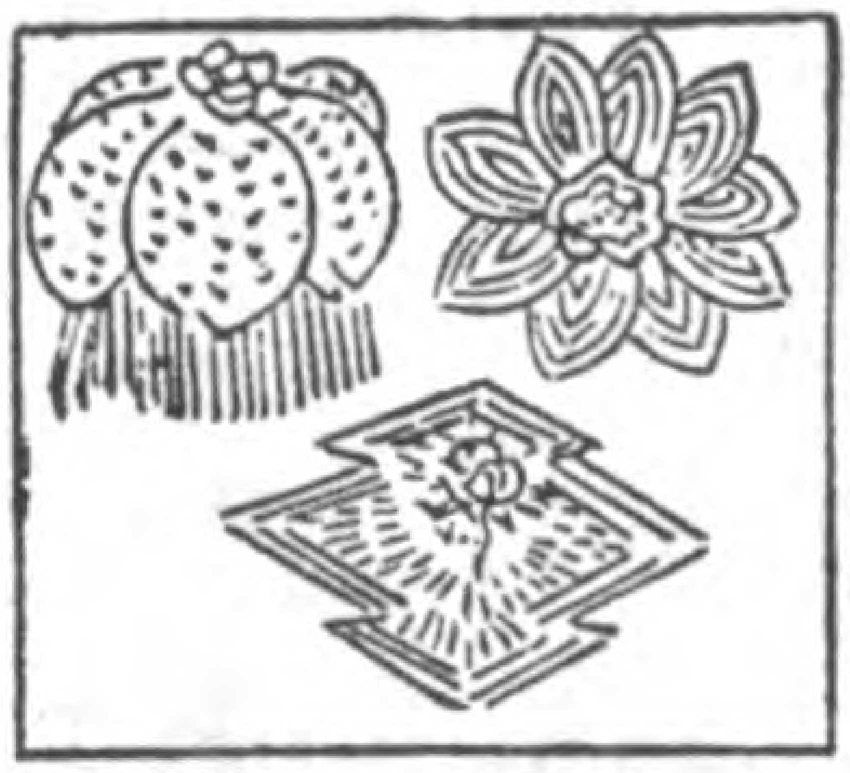
十圓より廿五圓、中十五圓より廿圓、並十二圓より十五圓、下等七八圓より十一圓)。

網形手提

網形手提とは絹絲を以て網狀に結びたる婦人持の手提新形なり、「ブラシユ」の革鞄等より遙に優にして美、色は淡藤、利久茶、時代紫、淡紫等最も行はるといふ、

摘み細工

此頃能く流行する花簪は重にゴム製の時候花なれども、這は短生命の時好に過ぎず、實際最も多くの流行は、圖に依つて示さるゝが如く、

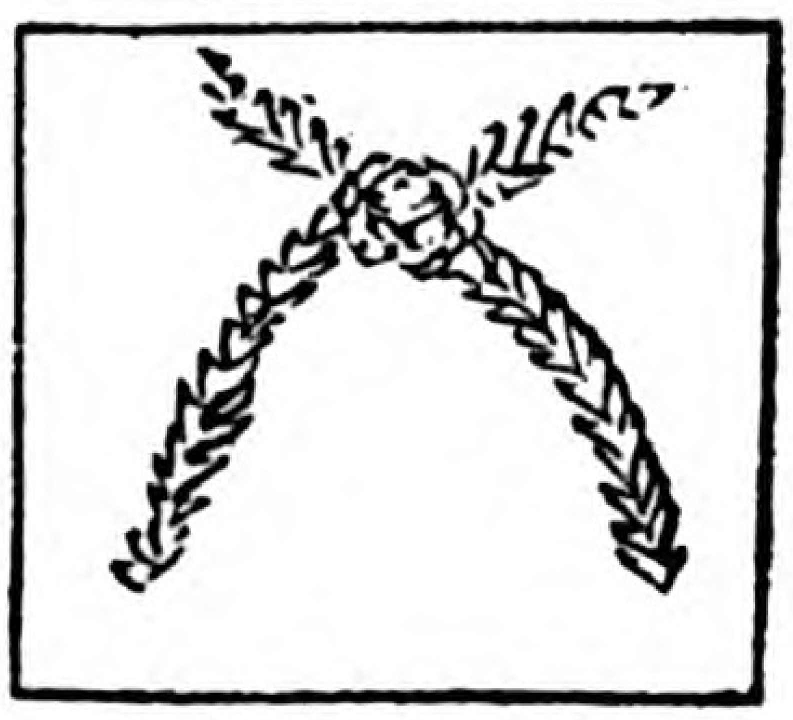


摘み細工の花簪なり、就中細工のこまかき物を好み、譬へば圖中の二個の松川菱さ葛の如きは實に精巧中の精巧なるものなり、一個の粗菊も亦可憐ならずさせんや、(價十四五錢より二十錢)ゴム製は價廉なるが上に外見好きものなれば素人好のする事は無論なれども、未だ摘み細工の高尚にして優美なるに如かず、而して摘み細工は四時の嫌なく少女の黒髪に植ゑられて美風を添ゆる啻に若干に止まらざるべし。

貴族的と平民的と(羽織地)

近來肥馬を驅り行く黒塗馬車中の殿様を見るに、多く博多織の白羽織を着し玉ふを見る、これは價格十二三圓より十五六圓のものなれば羽織としては先づ貴族的の上々なるもの、若し平民的となれば昨年頃より弗々行はれ本年盛に流行する羽毛織に如くはなし、これは名古屋に產し黒地又は茶又は鼠に白の羽毛を織り交ぜしものなれば頗る美光形容すべからず、價は一圓三四十錢なれば外見の割には廉し、書生羽織にも仕立なば至極妙なり、併し屢々洗濯すれば羽毛の脫飛する恐ありゝ是のみは羽毛織の欠點なれども二年や三年着たればとて破損等の患なかるべし。

金モールの根掛



金モール根掛

近來新しく流行し始めしは金モールの根掛なり、多說を要せず、其形は上圖によりて明なり、但し銀臺金「モール」十二錢より三十五錢大小は一號より五號に至る、然れども此新流行を貫して銅臺に「モール」をかけ右定價より低廉に賣捌くものあり、宜しく注意あるべし。

日用品物價　（二十一日）

◎白米小賣　前報來霖雨甚しく關西地方は洪水の天災比々なりしを以て東京定期米も目つ切上進し本日は八圓三十五錢の高直に至れり而して其小賣に於ても左の如く引締れり
⊙（圓に付）●一等白米八升六合●二等白米八升八合●三等白米九升●四等白米九升五合●五等白米九升九合
◎雜穀　室割小豆一斗三升二合●粕壁源色小豆一斗三升●本場達摩金時一斗三升●銚子隱元一斗三合●新日無白さ九升八合●常州小川小豆一斗三升五合●本場平豆一斗五升●新川越豌豆一斗六升五合●鶉隱元豆一斗四升八合●新吉原大豆一斗六升五合●室蘭黑豆一斗七升五合
◎木炭　追々向寒さなりたれば一割より五分方引締る
◎石油　差して變らずさて其大相場は（一箱に付）●上ホーキ一圓六十五錢より一圓六十四錢●二番同一圓六十二錢●上月ロシヤ一圓五十二錢●上錨ロシヤ一圓六十五錢より一圓六十四錢●同二番品切●上チヤスタ一圓六十六錢より一圓六十五錢
◎鶏卵　は生魚の廉價なるため大中小孰れも小賣にて二厘も下落大相場は（改正千個に付）●本〆十四匁十四圓より十四圓二十錢●天切名目十四匁廻り十三圓十七錢より十三圓八十錢●大玉本〆十二匁十三圓より十三圓二十錢●同名目十二匁廻り十二圓七十錢より十二圓八十錢●中玉上十一圓三十錢●並十一圓●並玉上十圓五十錢より下十圓三十錢●上海玉三百六十より四百個（一函に付）三圓九十錢より四圓三十錢
◎食料鳥類　（一〆目に付）●若鶏一圓十錢より八十五錢●丸鶏一圓より九十錢●爪鶏五十五錢●家鴨九十五錢●七面鳥二圓●鷺鳥八十五錢（一羽に付）●鶉三十錢●土鳩活鳥二テ十五錢●眞鴫十四錢●小鴨十八錢（一番に付）●長鴨六十五錢●よし鴨五十八錢●眞鴨八十錢
◎松茸　京都邊より盛に輸入し來れり相場は百目二十錢より二十四五錢

雜録

遺珠類々

○若し我等の願望盡く滿足さるゝ時は我等が樂の過半は爲めに消へ失す可し　ウエテレル
○罪は歴史を書き、善は常に默す　ゲーテー
○人若し二十にして美ならず、三十にして强からず、四十にして知ならず、五十にして富まずんば、終生美たり强たり知者たり富人たるの時なかる可し　西班牙俚諺

偶話

狼と小羊

一疋の狼と一疋の小羊ありけるが孰れも咽喉渇き一の谷川へ來りて狼は谷川の上流に小羊は狼より下流の方にて各自に水を飲み居たりしが名に負ふ貪食家の本色とて狼の山賊は一時に勃々と食欲しくなり小羊に向ひ喧嘩を吹掛けたり　狼「コレ〳〵小羊奴貴樣は乃公が折角甘く水を飲むでるのに横合から來て混ぜッ返へしやがつて一躰全躰如何云ふ了簡だ」小羊はブル〳〵慄ひながら　小羊「コレハ〳〵お叱言で恐入りますが何ンで下拙が尊公が仰ッしやる樣な不埒を働くとが出來まし

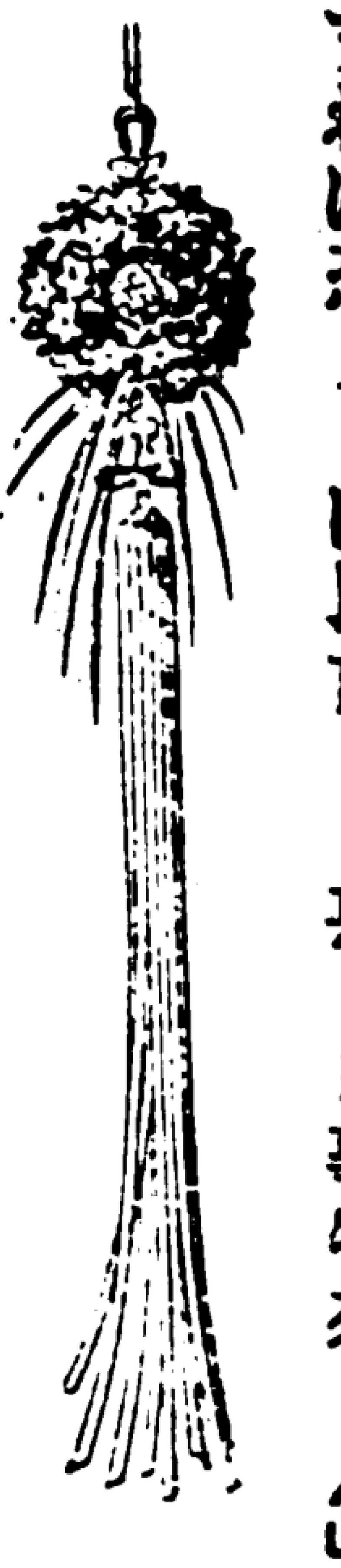
やうアレ彼の通り水は尊公の方から下拙の方へ流れて參るではムイませんか」小羊の言へる理の當然にグツト詰りしが不敬の白徒倘ほも疲まず　狼「コノ青二才奴貴様は六ケ月以前に乃公達のとを悪るく言ッたな」小羊「コレハシタリ滅相な其時分には未だ下拙は生れて居りませんもの」狼「ムヽ、チヤ貴様の爺父の禿頭であつたのだわい」斯くて狼は理不盡にも矢庭に小羊を噬殺ろし骨も殘さず喰盡し自己が腹を肥やしける
コノ寓意談は虚妄の辭柄を以て無辜良民を害する世の白徒を描出せるなり

一人の王を欲しがる蛙群

雅典の人民が正しき律法の治下に繁榮へし頃餘りに自由に偏倚りて其極終に時の政府を顛覆し而して彼等の邪魔になる舊來の諸制度を破壊せり時に反逆を謀るの徒黨國内此處彼處に起りピシストラツトと云へる反逆人は暴力を以て雅典の市の守護なる城を乗取り國家の權を自己の手に握りしが雅典の人民は哀れなる彼等の奴隷の境遇を悲しみけり是れ反逆人ピシストラツトの殘酷たらしきがためにあらで彼等が馴れぬ束縛に身を窘しめらるゝとの最とも堪えがたく彼等の眼に映りしものから此の如く雅典の人民は彼等の不幸を嘆きしかばエソツプは寓意談を設けて彼等を慰め諭せり
一個の沼の面を自由自在に彷徨き廻はる蛙の一群ありけるが彼等は彼等の規律正しからざる習俗を抑制ふるに足るべき氣力を備ふる一人の王を吾儕に降し玉へと大聲を發げて諸神の父なるチユピテールの神に願事しけるがチユピテールの神はクス〳〵と打笑ひ玉ひ何ンの才能もなき一人の王を與へ玉ひしがコノ王は不意に然かも騒々敷物音して沼の面に墜落ち玉ひしにぞ臆病なる沼の住人等はアツト言ッて青くなり皆一同に小さくなりて片隅に控居たり話頭一轉下界へ天降り玉ひし大王には時刻移るまで泥土の中にモグリ込みて在せしが一疋の蛙怖は〳〵ながら靜ッと水面に頭を擡げ大王の人物を窺ひ居たりしが頓て仲間の者共を呼立て今は最初の恐怖は痕方もなく消失せ無禮にも我劣らじと東西南北に游ぎ廻はり或は浮木の上を飛ンだり跳ねたり

思ふ存分に振舞ひて大王に耻辱を與へたる揚句の果に彼等はヂユピテールの許に委員を派して現在の王は能無しなれば他の王と交換へ給へと請願せしが今度前の王に更迭りてヂユピテールの神より送られしは一疋の恐ろしき蛇なりしが新來の王は畏ろしき口を開らき片ッ端より蛙共を呑め始め玉ひしが如何で蛙共は蛇に敵對ひ得んや如何に身を拕けばとて如何で生命を完ふし得べき怖ち畏れて今は聲さへ得立てず其處で彼等は内〱ヂユピテールの一子メルキユールを以て彼等の上に憐憫を垂れ玉へとヂユピテールの神に執成さしめけるがヂユピテールの神「汝等彼の善王を王とするを拒みし故厭でも今度は前の王より悪しき王に隨身せねばならぬぞよ」と答へ玉へり

エソップは倘ほ語を添えて曰くエソップ「オヽ汝市民等よ汝の現在の苦難を忍べよ若し然らずして他に求めんとすれば恐らくは以前より悪しき事物來らん」



談叢

磯の文箱

さらぬだに人の別れは悲しきを雲海萬里征戰の旅に赴き、何時歸るべしとも思はれず、日々に濱邊にさすらへば、海上の風雲心を傷ましむるたねとなり、磯吹く松の風さへいと〱身にしむばかりなり。

人生の悲痛は彼女の上にきはまりき。妻を懐ひ夫を懐ふ切なる彼等が間はむごき遠征の徵に由てひきさかれ、彼女の良人は生死定めぬ異郷の戰に趨り、獨り空房に宿して其愛する人の征途を氣遣へる彼女は如何に氣遣はしく、彼方の空をながめたりしぞ。

彼女は雨の日にも思ひき。彼女は風の夜にも思ひき。」軍の門出に美はしく着飾りつる其愛する人の武者ぶりは、久しく彼女の眼底に刻まれき。馬を驅て村巷を出でたる其愛する人の後姿は久しく彼女の念頭に留まり

き。

彼女は積る思ひに得堪えずして、其思ひの幾分をなりとも其思ふ所に告げまく思ひ、以て聊か自ら慰めんとしける。便りの船は遂に彼女の思ひを載せて漕ぎ去りぬ。

彼女とは誰ぞや。

彼女は薩摩島津家の内に小野攝津守と聞えたるものゝ女にして名は菊、肥前龍造寺の瀬川采女正が妻なり。

瀬川采女は文祿征韓の役、徴に應じて彼の國に渡りつゝ、高麗陣中に在りけるが、胡馬北風に依り、越鳥南枝に巣くふならひなれは、邊聲を聞て故國を思はぬにはあらざれど、爭でか意氣明の四百州を呑まんと欲する殿下太閤の命によりて、其歸郷を許さるべしと憶はんや。彼は實に不思議なる特典に逢ひける。

そは又何故なりしか。

* * * *

朝鮮海峡荒れて渡航の路もとだゆるはがり、おどろくしく鳴る風の音は、岸に碎くる波濤の響にまじり、磯馴松が枝摧け、浦の苫屋壞れ、其物凄きこといかばかりもあらざりき。

博多の浦廻に打寄する船の板包めるものなど、磯に立ちたる蜑の子等が引き揚げくしける程に、中に一つの謎ぞめやうの紙に裹みしものを見出しける。

披き見れば誰やらん文箱と覺ぼしくて、氣高きさまの蒔繪など、よしありげに見えける故、我等が披露も憚りありと吏人に告げ、文箱は太閤殿下の前に置かれて、右筆山中山城守の手に披かれぬ。

見れば優しき女文字長々と書きつけける。

たよりの舟をよろこびそゞろに取向ひまゐらせ候。たゆるまもなくなつかしみ思ひ侍る事もおほかめれど、心をあはせかたろふべき人もなければ、閨寂び、獨り片敷く袖の露、床は海枕は山と立ちのぼる、胸の

煙はるゝまもなき涙の雨そゝぎ、いつをかぎりの露の身の消えやらぬ程もうらめしぞかし。そのあらましを聊かしらせまいらせ候。そこほど（君）は世渡る業の事繁にとりまぎれ、もはやこゝほど（我）の事は思ぼし出さるゝ事もなみのおとすさまじき御心とやなりぬらんと、思ひの種胸の中にしげりあひぬるまゝ、すゞりに向ひ、とりわづらふ筆のすみもなみだの海とやなる。

　行水にかずかくよりもはかなきは
　　おもはぬ人を思ふものかは。

とよみおく和歌のふることまでも、我身の上に覺へて、其人の心の中をしはかり、すこしは慰みぬ。思へば〳〵添ひまゐらせぬむかしも有つるに、こはなにのむくひにおはしますぞや、あさましかりつる我心かなとは思へども、よきにとまらぬ心のくせとして又こひしう思ひまゐらせ、物の怪も有やうに人もいひなし、我も又心のたゞしからぬ事をしれり。抑心は身にそふ物なれば身のまゝになるべき物なるか、されば心のまゝに身はなるものとこそ見へ侍れ。まことに心は身の主なりとふるき文に多く見へしが、げにも左も覺へぬ。いかなる神のむすびあはせにや、あさはかなる契りとは成ぬらん。ある人ふかう悲しびあへりし事の有しを、いやそれははかなき事にて侍るなり、たゞ思ひすてさせたまへと諌めつることの有しが、かく我身の上になりぬれば、そのしなくらうして、あやなき事をなん思ひこがるゝも、女の身なればとて又口おしからざらめや。心を心のまゝにせざらんも猶あきたらず覺え侍りぬ。たゞすの神の御慮には違ふ事にて侍れども、これより後は戀せじとこそ祈り申べけれ。いにしへより今にためしすくなき高麗唐土とやらんへ渡り給ふ、限りなき海山を隔て互に風のたよりをさへ聞きかねまゐらせ候

得ば、かく思ひのたえんとせしも亦むべならざらんや。天正十八年の秋より其の春高麗の國へ御陣有へきむね仰有しかども、更に實ともおぼえ侍らで多くの月日を過し侍りしが、いつの間にやらん文祿の年の三月にも移り來て、明日は高麗の國へ舟出し給ふなるを何方もと〲しうの丶しりあへりぬ。大かた夜も半ちから更しかば、行末の事などかはらじとのみ語りつ丶頼めをきつるに、はや明かたの空に成て別れを急ぐ鳥の聲々打しきりしかば、

身はかくてさすらへぬとも君があたり
　さらぬかゞみのかげははなれじ。

とよみをく和歌の如く、是をかたみにとたゝふ紙ながら殘しをき給ひしを、まことに袖より外にもらすかたもなく、恨みてはよみ、よみてはかこち、朝な夕な詠めくらし侍りぬ。

思ひつゝぬればや人の見えつらん
　夢としりせば覺めざらましを

と小町がよみし言の葉も、げにさる事ぞかし。

かぎりとてわかるゝみちの悲しきに
　いかまほしきは命なりけり。

まことにはかなき命ながらへ、かゝる思ひもあさましく覺え侍れども、今一度見もし、つもりぬる事もはらしまゐらせたく候て、あだなる露の玉の緒もながゝれとのみ祈る計にてこそ候へ。何事も〱あはれとおぼしめし出され候はゞ、かず〱御うれしく思ひまいらせ候。申たき事どもこよなう（限りなきの意なり）おはしまし候へども、あはたゞしき出船のいそぎにとりまぎれ、いかゞ申候やみゆるし候はゞ、めでたくかしく。

くり返し〲そのゝち消息のおとづれもおはしまさず、御床しさのほどたえがたく、あまりに人めもはづかしくこそ候へ。まことに出やらぬねや

のうちふかき思ひの淵となりけり。

かくあらんゆくゑをしらでたのみつる
我心をばたれにかこたん。

是はみづからおもひよりにておはしまし候。御はづかしくこそ候へ。めでたく〳〵。

五月五日　　菊

せ川うねめ殿にて
人々申給へ

時事一斑

行幸

二十日天皇陛下群馬縣に幸し近衛師團の演習を覧給へり。

帝國議會召集令

帝國議會召集令は去る十二日下りぬ。

朕帝國憲法第七條及第四十一條に依り本年十一月二十五日を以て帝國議會を東京に召集す

御名　御璽

暴風暴雨

暴風暴雨去る十四日大に至り、中國四國九州の北部を中心とし、岡山德島鳥取大分諸縣大水最も甚しと云ふ。家流れ、人死し、破屋死傷百を以て數ふ。慘悽又慘悽なる哉。

教育界宿弊改革の餘波

井上文部大臣が我邦教育界の宿弊を改革せんとするや、辻伊澤二派の人々が之に反對して舊勢を維持せんとするは、已に久しき事なるが、之が爲めにや、辻氏の率ゆる大日本教育會に於て、是迄名譽會員たりし伊藤博文井上馨大山巖西鄕從道後藤象次郎芳川顯正陸奥宗光の諸氏は、去十八日其名譽會員たる事を辭せり。

秋光

秋光臻る、立田姫秋の錦を梢に織り出さんとし、東籬の菊花また霜晨に傲らんとす。秋意趣致なきにあらざるかな。

社告

◎家庭雜誌 五號六號十三號 品切れ

家庭雜誌

發行日改正 毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純朗

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地秀英舍印行